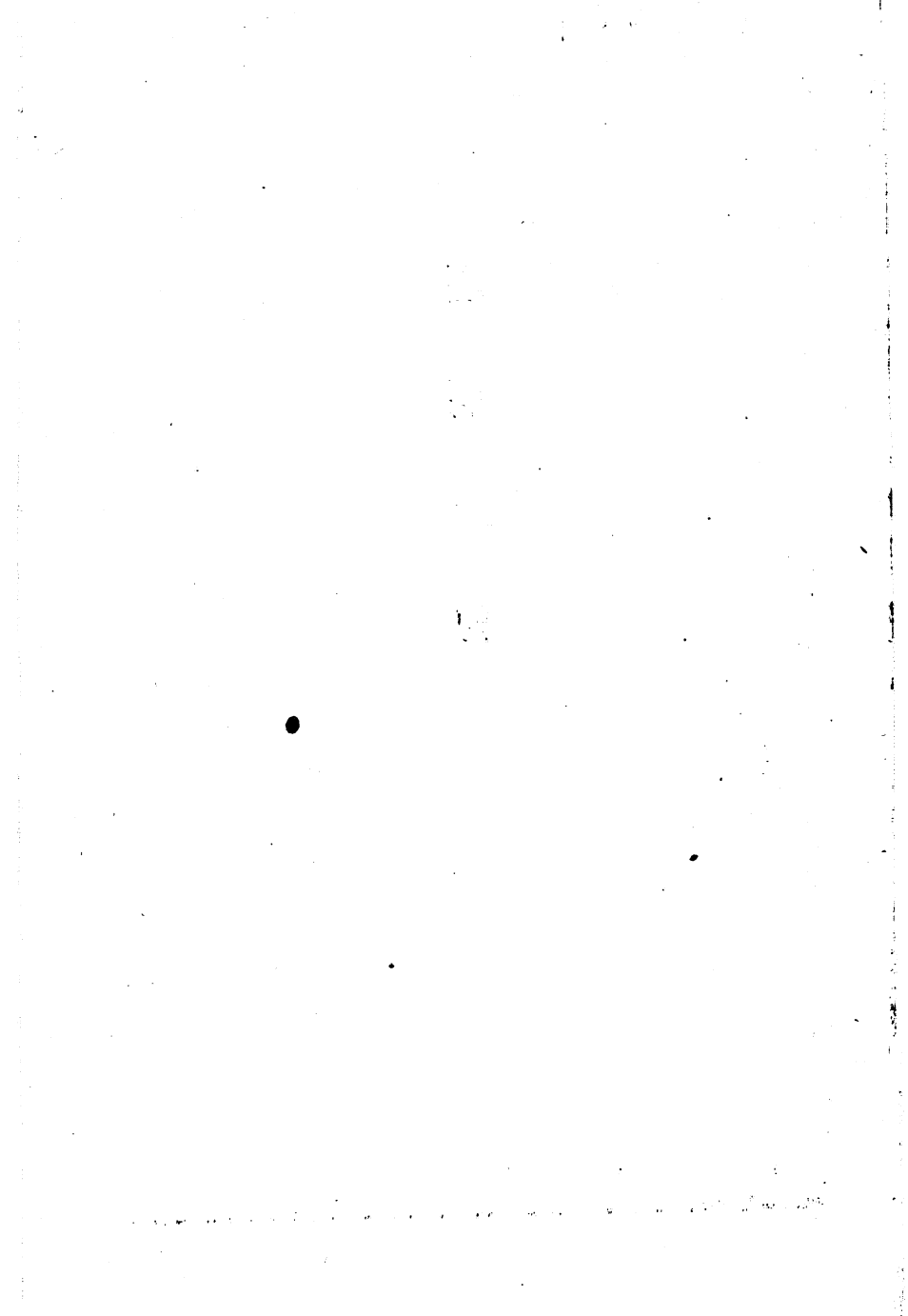


瑠
璃
天
狗



題瑠璃天狗首

別占宏宇宙兼愛好風光四時移變幻一日有興亡窮途遊子恨薄命美人傷誤軀過病患晦跡託徃狂或尋塵外靜却混世中忙丹心
偏報國白首克勤王公孫時隱僕姬子亦爲倡千金當寶劍一炷駐名香吟行追蝶蝶獨臥戀鴛鴦梅與曉夢發柳惹春癩長日中期約
東夜半苦相償豈無解亂手必有挫奸觴溫袍初立志衣錦竟歸鄉庶如以雜劇誰道說荒唐唐文窺庄子室解上郭生堂見偏窺欲嫉
惡自懲行誦絃語事實下學習篇章獨謠對月枕共樂弄花床伎加泣闔氏調和惱周郎視收懷孝悌聽取創忠良縱然世俗樂學兮亦
何妨人間那般事如是大戲場

右

文化丙寅秋日掠鬢居士書於浪華客舍爲友人養筮翁

瑠璃天狗附言

往昔穗積先生のあらはされたる難波土産といふ書にむかしの淨瑠璃の文句をすこしづゝ注釋し其一齣の趣向あるひ
は文句のつゞけがらを評したりといへども其注釋のくはしからぬのみにあらず儒者じゆしゃ氣でかたくななる論どものまじり
たれば見る人あくびかちなるによりて我養筮翁先生あらたに此書を著せり今のよの淨るりを演なる人この本を見たまは
ば文句のこゝろ明らかにかかりて心いきよくうつり詞のいきこみたしかにされてめりはりに味はひを生ずべし又淨る
り本をつぶよみにする人この本をみたまはゞ文句にこもりたる故事のわけ古歌の心など多くの書籍を引てたしかにし

るしたれば和漢の學問にすゝむ階梯となる事多かるべし

近來の板本に正本をうつしあやまりたることすくなからずたとへば川中嶋の配膳の齧に牛の刀といふことを牛の力と書てかなづけまてかへてあるゆゑ歴々の演者も牛のちからとかたたるゝ事きのどくなるもの也すべてかやうのたがひを此書にはくはしくあらためたゞしたり

此書卷之一金闍寺の齧くりから龍の注を本文に脱せるを今こゝに擧ぐ○俱利迦羅といふは天竺の語也玄應音義には迦羅迦龍とも書て漢土にては黒龍と翻譯す其龍劍を纏ひ繞るこれ不動明王の形なりと有また不動秘密法には壁の上にひとつの劍を畫き古力迦龍王を以てこの劍の上に繞はせ其劍の中に阿字を書き心中この劍を觀し又心に不動を念じて六箇月に滿るときは古力迦龍王みづから其かたちを現じ人の形となりて常に其人に相したがひ驅使ふところに任すと有此經説によつてつるぎをくりから丸と名づけたる物なりといへりこの一條養笠翁先生の原本をうつす時書おとせしゆゑ此所にしるし侍り看官その疎漏を嘲りたまふことなくむば幸甚

懸 金 堂 主 人 謹 識

目 録

卷之壹

信仰記 金閣寺之段

菅原 道明寺之段奥

同 寺子屋之段

ひらかな 無間鐘之段

卷之貳

うす雪 清水之段

同 腹切之段

同 道行

千本櫻 狐之段

愛護稚 みちゆき

同 山の段

卷之三

妹脊山 三段目切

忠臣藏 山科之段

壽門松 新町之段

卷之四

矢口渡 渡守之段

輿山姥 二段目切

近江源氏 船長之段

卷之五

川中嶋 配膳之段

東帶鑑 うつほ猿之段

目 録 終

瑠 璃 天 狗 卷 之 一

賽 笠 翁 著

○ 祇園祭禮信仰記 金閣寺の段

そもく金閣寺と申は鹿苑院の相國義滿公の山亭三重の樓造庭には八つの致景を移し夜泊の石岩下の水龍の流も春深く柳櫻を植交て今ぞ都の錦なる

金閣寺はむかし西園寺公經公の山莊にてこの邊に西園寺といふ寺を建たまひしを足利三代太政大臣義滿公剃髮して道義と號し此地を請ふて隱居所としたまひ第宅を建て鹿苑院といふ額をかけられ庭に三重の閣を設け給ふこの閣の内外ことくく金箔を貼せ給ふゆゑ世に金閣寺と稱したり此庭に入景あり法水院・潮音洞、究竟頂、鏡湖池、岩下水、龍門瀑、銀河泉、安民澤是なり又池のほとりに九山入海の石ならびに夜泊石、赤松石ありこの赤松石は赤松家より獻する所也といふ委しくは雍州府志に見えたりこゝに相國といふは太政大臣の唐名なり柳櫻の歌は古今集に「見たせはやなきさくらをこきませて都そはるのにしきなりけりとよめる素性法師の歌也

究竟頂に押こめた慶壽院此天井楯の一枚板

究竟頂とは此上なき頂上といふ事にてこの三重の閣の三階にて則この庭の八景の一つ也雍州府志に三間四面の一枚板をもつて床とす見えたるを天井の事につくりかへたるなり

狩野助直信が雪姫ならでないといふ

直信は繪師の主馬尙信のこと也自適齋と號して探幽法印の弟也雪姬は雪信と云女繪師のことにて探幽の姪孫也雪姬も同じ様に何やら斟酌

斟酌は杓をもつて酒をくみうつはものに入てその深さ淺さを量る也と四書通義に注す物を見はからひ酌はかる心はいふなり

慶壽院が警固隨分と怠るなと

警固はいましめかたむるとよむ字にてきびしくかこふ事也

彼王陵が母を擒同前

漢の高祖と楚の項羽と争闘のとき王陵數千の兵を集めて漢祖の方に付ぬ項羽王陵をよばんと思ふ心深かりければはかりて王陵が母を取籠て王陵をよぶに陵が母ひそかに王陵がもとへ使をつかはしわが身とりことなるともいたみ思ふべからず漢王の爲に忠をきはめて二心を見せ奉るなと云ひやりさて我身ながらへてあらば王陵それ故に心よはき事もあらんと思ひてつるぎにふして命をうしなひたること前漢書にみえたり

王昭君が胡地の花色香失ふ風情也

漢の元帝の宮女王嬪字は昭君胡地のえびす國にゆきて都をおもひしたひしありさまをいへり

雪舟様より父將監迄傳はりしが

雪舟名は等揚といひ雪谷軒と號す備中の人にて永祿三年八十七歳にて卒す將監といふは土佐の光高のことにて雪信の父にはあらずかれこれの畫かきをとり合はせて狂言につくれり

岩下の井戸へ釣おろし

岩下水はこの庭の八景のうちなり

古へ齊の晏子といふ者身の長は三尺なれども諸侯の上に立て國政をとり行ふ

齊の晏嬰身の長わづかに三尺なれどもよく主人の景公を補佐して諸侯の上にたちたる事晏子春秋にみえたり

人には一つの癖有物とは慈鎮が歌

奈良の一乘院の御門主は慈鎮和尚の御舍弟なりしが八月十五夜中門にたゞずみ給ひける折しも御力者あまた御庭を掃除しけるに傍輩どもいかに今宵慈鎮坊の歌よませ給ふらんといひあへるを聞き召て翌日慈鎮和尚の御もとへ狀を進ぜられし様は一山の貫主三千の棟梁にておはしませば眞言止觀の兩宗をこそ興行もあるべき事に候へ日夜風月のたはふれを翫び給ひ候こと釋門の義にもそむきかへつて凡俗の體に着せられ候事もつたひなく候御室のめしつかい候奴原去ぬる夜の月に御身の上の事を申しさた仕候向後は此道を御さし置候へかすと存候と教訓狀を進ぜられしかば慈鎮御返事によるこび入候とておくに一首の歌をかき給へり「みな人の一つのくせはあるそとよ我にはゆるせ敷しまの道と遊ばされてまみられしかば門主沙汰のかぎり也とてまた申させたまふ事もなくやみ給ひきと清巖茶話に見えたり

天竺波羅那國の大王まつ此ごとく碁に打入あやまつて沙門を殺した引事

是は太平記の引事のまゝ也この事は丹桂籍だんけいせきにはく梁の樁頭きょうとうといふ僧よく戒律を守られけるゆゑ武帝これを崇め信ぜられしがある日此僧と武帝と碁をうたれけるに武帝碁のことばにて殺着せよとのたまひければ近臣遂にこの僧を斬たり後に武帝これを悔みてかの僧の末期に何をかいひしと思ひ給へば彼臣下のいはく僧罪なくして殺さるゝ事は前世にて我沙門たりしが冬の比地をほるとて一つの白き蚯蚓を斬りたり此みゝず帝の前生の身なりこの因縁にて今かくのごとしといひたりと云々

下邳の土橋に石公が杵を擗し張良もかくやと計りいさましゝ

前漢書に云張良わかきとき下邳といふ所の橋の上に行てあそびけるにひとりの老翁あり杵をはしの下におとして張良にとりてはかせよといふを心よからぬ事とは思へど老人のいふことなればと杵を取て跪てはかするに翁立ながらはきて咲ふて去ぬしばし有て翁また歸り來り汝に道を教へんと云則太公が兵法を授たり張良これをよみて後に漢の高帝の師となれり此老翁は黄石公也

令する詞に

令はものをいひつける事なり

父雪村迄傳はりしが

雪村は雪舟の弟子にて元龜天正のころの繪師也雪信の父にはあらず

雨をおびたる海棠桃李

白樂天の長恨歌に楊貴妃のすがたをいふとて梨花一枝春雨を帶と作りまた春風桃李花の開く日といふ句もあるゆゑこれらをとりに合せたる也

屠所の羊のあゆみ兼

屠所は獸を料理する所也そこへ引れて行く羊のひとつ／＼死地に近づくとへにて摩耶經に出たり又この心を赤染の衛門の歌に「けふもまた午の貝こそふきつなれひとつじのあゆみちかつきぬらんとよめり此うたは後拾遺集に出たり

三井寺の頼蒙法師の一念鼠となり牙を以て經文を喰さき恨をはらせし例も有

三井寺實相房の頼蒙阿闍梨白河院の御後の腹に皇子誕生のことを祈けるに勸賞望にまかすべきよしなりければ皇子御誕生の後戒壇堂を建んことを乞ふに其事勅許なかりければ頼蒙大にいかりかの皇子を祈りかへし奉りその身は持

佛堂にて干死^ひしければ彼皇子は四歳にてかくれさせ給ひけり其後叡山の良眞に仰せて祈らせられ皇子御誕生ありければまた頼豪の死靈怨をおこし鬼角山門の有ゆゑ也とて鼠となりて一山の聖教の經どもをくひやぶりし事江州一景録につまびらか也

繩目の葛草の根を月日の鼠が喰切く

人の命を草の根にたとへ月日を黑白の鼠に譬へたりこの事は賓頭盧爲優陀延王說法經に見えたり又散木集に見えたる俊頼の歌に「わかたのむ草の根をはむ鼠そとおもへば月のうらめしきかな又土御門院の御歌に「霜かれの草葉にさはく日の鼠きのふのけふになるぞほとなき

青陽の東に當つて木曜星壽命家に建す時は忠臣君に代るといふ

青陽は春の異名木曜星は九星の星のうち也家に建すとまは亥の方にむかふ也忠臣君に代るとは忠義の臣下君にかはつて政をとり行ふなり

木づたふましら

ましらは猿のこと也

かけたる類は潮音洞の椽側へ

潮音洞も此庭の入景の内にて三重の閣の第二なり

釋迦觀勢の三尊佛

雍州府志に云庭に三重の閣を設け第一を法水院と號す本尊釋迦左右に觀音勢至ありと云々

いふに念誦をとゞめ給ひ

念誦は佛號經文などをとなへる事也

立明しの灯をうつせば威南塘が火龍炮ぞんくともへ上り

立明しは燭臺の火の事なりつれく草に立あかししろくせよといふこと有威南塘は明の代の兵衛者なり火龍炮はのろしの名なり

天地にひゞき動搖せり

動搖はうごきうごくなり

とり付さがるさゝがにの蜘蛛のふるまひいとあやうき

さゝがには小々蟹と書て蜘蛛のことなり蜘蛛の形はちひさき蟹に似たる故さゝがにと云也「わがせこか來べきよひなり

さゝがにのくものふるまひかねてしるしもとよみ給へる衣通姫の御歌の詞をとれり扱くもの糸を最といふ字にかけ

ていとあやうきとつゞけたり

力士の如く真中にすつくと立たる松永大膳

金剛力士とて唐の則天皇后の左右に給事せし強力の者のこと也事は唐書にいつ

供奉する眞柴は大鷗の萬里に羽うつ朝嵐

大鷗といふ鳥はひとたび羽うてば九萬里をかけるといふ事莊子に出たり夫を久吉の威勢にたとへたる也

瀧は今より龍門の名を萬天に鳴ひゞく

龍門瀑といふ瀧も此庭の八景のひとつ也

○菅原傳授手習鑑 道明寺齋

歸洛を松の島臺行末祝ふ殿斗昆布

歸洛はみやこへかへるといふことなり島臺はむかしの洲濱といふものゝかたちをうつしたる也むかしは貴人へ物をさゝげる時すはまがたを木にて作りそれを臺にして金銀のつくりものをのせあるひは草花などをうゑてさゝげし事古き物がたりに見えたり此臺は海の洲さき濱などのかたちになぞらへてつくる故洲濱といふ也菅家の御うたにも「秋風のふきあけにたてるしらきくは花かあらぬか波のよするかと讀せたまひて吹上の濱の菊をすはまにうゑて君にさゝげたまひし事古今集に見えたりもと此洲濱といふものは蓬萊。方丈。瀛洲といふ仙人のすむ三つの嶋をうつしたるものゝよし中右記に見えたられば後にそれを島臺と名付てめてたき事に用ゆる道具とせし也殿斗のことは秋草に云今の世に三寶に伸咆をすゑて客人へ出すを臺殿斗といふ也古代客をもてなす初にのしあはびを出す事なし手掛といふ物を出せし也手掛は檜木にて折敷のごとく平く六角にして少しふちをつけたるもの也其臺の上に五色の削ものを高盛にすと也其内の黄色がのしあはびなり此のしあはびを殿斗といふ字に書は誤也殿斗の字は衣の皺をのばす火のしのこと也又のしあはびをのしと計り書も誤也

菅丞相

菅原の道眞公右大臣なりしゆゑ菅丞相と申奉る丞相は大臣の唐名也

判官代

すべて官人に四分配當といふ事有て長官次官判官主典とわかるゝ也長官はかしら次官はすけ判官は其官の役目をかしらとすけとよりわけてつとむる役なり主典は其官の筆取也後に判官代といふは仙洞の官人の事にて諸大夫是に任ずるよし職原抄の注にみたり

路次の用心

路次は道すがらといふこと也

譜代の家來

譜代とは代々の家來といふ事也續日本紀には譜第と書たり又家來といふ事は下學集に家來は家人の義也と有職原抄にも家禮と書り源氏の花鳥餘情に家禮といふは子の父をうやまふ事也他人なれども子になぞらへて禮をいたすをば今の世にも家禮といひ來れりとありしかれば今の上に家來とかくは宛字にて本字は家禮とかくべき也

かりや姫

菅丞相の御女にかやうの御名ある事なしこれは須磨の記といふ僞書有て菅公の御作の文章といひ傳へつくしへさすらへの御時都より津の國の須磨までの道の記にかきなしたる物にて其中にかりや姫といふ名有て菅家の御孫としたりまた白太夫といふものもかの須磨の記の中に見えたり

若黨中間

本朝の俗雜兵をよびて白齒者かしはと云今いふ若黨これ也と書言字考に見えたり中間の事は秋草に云むかしは侍中間小者と次第して侍と小者との間なるゆゑ中間といひたる也中間といふもの昔よりあり源平盛衰記十三に黒丸といふ御中間と云こと有是は高倉宮の中間をいふと見えたり

白狀さするそれ引立と

白狀の字は漢書の丙吉が傳にも出たる字にて其ありさまをありやうに云ひあらはす事なり

詞のてんぐ

展轉とかく字也漢書の注に展轉とはその心を移し動すを云と有ていろく詞のかはる事也

弓手の膚あはだ

軍術の書に左の手を弓手とも雄手とも書り弓をもつ手なる故弓手といひ又左は陽の方なるゆゑ男にたとへて雄手と

いひ右は陰の方なれば女にたとへて雌手とも妻手共書よし書言字考に見えたり
さすがに河内郡領の

むかしは郡々に大領少領の役人有て其一郡の政道をとりに行ひたり夫を郡領とも郡司ともいふ今の郡代のごとし
暫時の仰天

仰天は天を仰むくといふ心にてあきればたるさまを云

輝國が安堵く

安堵の堵の字は垣といふ字と同じ心にて通鑑の注に人の安然として墻堵の遷り動かざるか如しと有それゆゑに心の
落つきたる事を安堵といふ也

優美の姿

優美はやさしくうるはしとよむ字也

姫ひめ殿どの

あいやけはむこの親としようとの親とをいふ也

棟梁とうりやう殿どの

棟は家のむねのこと梁はうつばりの事にてものかしらを棟梁と云也重き臣下を棟梁の臣といひ大工の頭を棟梁と
いふも同じ心也

有爲轉變の世のならひ

有爲は此世にあるものゝこと轉變はうつりかはる事にて經文にある事也

罪業消滅

つみもごうもきえうせる心也

娘が菩提逆縁ながら弔ふ此尼種々因縁而求佛道

菩提は佛の道の事逆縁は親が子をとむらふはさかさまの因縁といふこと也種々の因縁にて佛道を求むといふも經の文也種々はさま／＼也

強欲非道

むりに欲深くして道ならぬことをするをいふなり

菅丞相の右手の方

雌手の事上に注す

暫時の睡眠

しばしねむりたる間と云事也

巨勢の金岡が書たる馬は夜な／＼出て萩の戸の萩を喰

巨勢の金岡は宇多の帝の時の上手の繪師也この金岡がかいたる馬の繪はよな／＼出て禁裏の萩の戸といふ御殿の庭の萩をくひたる事古今著聞集に見えたり

唐土にも名畫の髣吳道子が墨繪の雲龍雨をふらせし例も有

是は名畫錄に出たる故事にて唐の玄宗のとき吳道子といふ人有仙術をえて畫の上手なりしが墨繪の龍をかきて雨をふらせし事有

身は荒磯の嶋守と

あら磯は波風のあらき磯ばたといふ事嶋守とは遠國へさすらへる人の我身を嶋守にたとへていふ詞なり家隆卿の歌

に「玉嶋やにみ嶋守かことし行河瀬ほのめく春の三日月ともよめり
上着の小袖かけたる伏籠もろとも」

秋草に云小袖といふはむかしはすべて袖の下を丸く縫たるを云袷にてもわた入にてもひとへ物かたびらにても袖の
下丸きは小袖なれども今はわた入のみを小袖といふ事になれり伏籠は順の和名抄には火籠と書たりまた漢土にては
薰籠とも書て衣裳に香をとめる爲に籠の上より衣類をふせて其中に火を籠る物ゆゑふせごと云也

浪風あらし揖枕

かちまくらとは船にてねること也歌に多くよめり

鳴ばこそわかれをいそげとりの音のきこえぬ里のあかつきもかな

これは決して菅家の御詠にはあらず後のよの人の別戀の歌なるべし

父はもとより籠の鳥雲井のむかし忍ばるゝ

籠鳥の雲をこふといふたとへにて此事は鶺鴒冠子に籠中の鳥空しく窺へども出ずといふ語より出たる詞也爰にてはと
らはれとなり給へる菅丞相をかごの鳥にたとへ禁裏を雲の上といふ故雲のむかし忍ばるゝと書なしたる物なり
涙の玉の木椶樹珠數の數々くりかへし

木椶樹はつぶの木也一名菩提樹ともいふその實を木椶子といひて珠數にもちゆる物なり此事崔豹が古今注に出たり
この木椶樹は今も河内の道明寺の境内にあるなり

○同 寺子屋齋

一字千金二千金三千世界の寶ぞと

一字千金といふことは史記の呂不韋が傳に出たる語にて呂不韋といふもの呂氏春秋といふ書物を作りて咸陽といふ市町の門に出し其書物の上に千金をかけおきてあまたの學者たちをよせ此書物の内にて一字よきことを増し加へるか一字あしきことをけづりのけてくれる人あらば其禮として此千金をあたふべしといひし故事也今この齣の枕のこゝと葉にこれを出したるは手ならひををしゆるも其様なるものにて無筆の者のためには一字が千金にも二千金にもあたるのとたとへなり千二千三千とつづけて三千世界のたからとかきつらねたる所か作者のはたらき也三千世界といふことは廣き世界といふ心にて佛説より出たる詞也

菅秀才

菅原の道真公の御子はあまたまし〜けれ共太宰府にてかくれさせ給ひし後に御家をつがせられたるは淳茂と申せし御方にて其御事をかやうに取くみたる狂言也秀才といふは才智の秀てたる人を云ふ

武部源藏

元祿のころ江戸に建部傳内といふ能書ありて今に傳内流といふ名残れりその人の名をかりてとりくみたる也

いたはり傳き

かしづくとはたいせつにそだてる事を云俗に娘をよめ入さする事をかしづけるといふは大なるあやまり也

一日に一字まなべば

毎日一字づゝならひても一年には三百六十字覺ゆるといふ心也

利發らしき

利は利利とてものにかしこくざとき心發は發明とてものをよくあきらめ見ひらく心なれば此二つの詞をあはせて利發と云也

ほんそ子

ほんそは奔走と書てものを世話やく時ははしりまはる物なれば父母の子を愛して育てる心にいひ傳へたる俗語なり
御内證様

内政とかくが本字にて人の女房はうちのとりまかなひをし夫は外をおもに勤るがつねなれば内の政とかきたる物也
それを誤りて内證と書來れり

まだぐはんぜがござりませぬ

ぐはんぜは觀世と書字にてよの中の事を觀じしることもなき子供のさまを云也

繁花の地とちがひ

片山家にてことしげく花やかならぬ所をいふ也

公家高家

公家は堂上方高家は武家の歴々をいふ

時平

本院の左大臣時平公と申て右大臣道眞公と共に延喜の帝を補佐し奉られしに道眞公文學にたけさせ給ひければ帝の御寵愛深かりしを時平つねに妬ましく思はれけるに時平の妹帝の御后なりければ其后より讒言を申上させられしゆ
ゑ帝もいつとなく御後の詞にまよはせ給ひて道眞公をつくしへ流させ給ふやうになりたり其讒言の趣意は道眞公の御むすめ齊世の親王に嫁し給ひける故御むこの親王を天子の御位につけ奉らんため當今延喜の帝をなきものにせんとたくませ給ふよしを時平より妹の御后を以て讒言せられし也其事は愚管抄梅城録などにつまびらか也されども此時平公は美男の色ごのみにて御伯父の大納言經信卿の北の方をうばひ歸りて妻とせられし事も十訓抄に見えておこ

なひはよろしからぬ人なれど今戯場に扮するやうなるおそろしくにくげにて車をふみくだく様なる人品にては有ざりし

玉簾の内

玉だれはみすのこと也玉はほめこと葉にて玉のやうなるすだれと云心也

屠所のあゆみ

屠はほふるとよみて獸をころして料理する所をいふ屠所の羊のことは信仰記の注に出たり

さうがうのかはる物

相形とかくか本字にて人相かたちといふ心也

死出三途の

閻魔王の國の界は死天山の南門なりといふ事十王經に有また三途川といふ事も同じ經に出てみな冥途の有さまをと

きたり

嫁にも喰さぬ此孫を

これは木みしり茄子にたとへたる續きの詞にて秋なすび嫁にくはすなといふことわざを取合せたる也此たとへの出所は夫木集の「秋なすびわさゝのかすにつけませてよめにはくれじたなにおくともといふ詞より出たりこの歌の心は秋茄子を酒のかすにつけませて棚にあげておくとも嫁にはくはすまじきと也是はその嫁をにくみてくはすまじきといふにはあらず秋なすびはたねのなきものなればそれにあやかりて子が出来まいかと案じ過しをするしうとめの深切なる心をいへりわさゝのかすは新酒の粕なり

こいつ有論と引とらへ

有論と書はあて字也本字は胡亂と書てみだりなるこゝろ也胡亂の字を唐音にてはうろんとよむ也
右大臣の若君

菅原道眞公昌泰三年右大臣に拜せられたまふよし公卿補任に見えたり
支番が權柄

權の字は秤の錘のこと柄の字は斧の柄の事にて前漢書に大臣權柄を操て國の政を持すと有て物のおさへになること
をけんへいといふ也

常張の鏡

これは宛字にて本字は淨顔梨の鏡と書是も炎魔王宮にあるかゞみにて罪人これにむかへば前生に作りし善惡の業直
にあらはるゝよし十王經にとけり

鐵札か金札か

十王經の注に善を金笥にしるし惡を鐵札にしるすと有て善と惡とのちがひめをいふとなり

一生懸命

懸命はかゝる命とよむ字にて人の一生の命のあやうき時と云こゝろ也

凡人ならぬ我君の御聖徳

たゞ人ならぬ菅丞相の聖人の様な御徳といふことなり

梅は飛櫻はかるゝ世の中に何とて松のつれなかるらん

此歌のことは源平盛衰記に菅原の大臣東風ふかばといふ御歌をよみ給ひしかば紅梅つくしへ飛行ければ同じ御所
にならびて有ける櫻の御言の葉にかゝらざることをつらみて一夜が中にかれにけるを源の順が歌に「梅はとびさく

らはかれぬ菅原やふかくそたのむ神のちかひを又揚鳴騷筆十九に云昌泰四年正月廿九日菅丞相を大宰權帥にうつし九州へ配流せさせ給ひけりかしこにて三とせの春秋を送らせ給ひしに都にて愛せさせたまふ梅花を思し召出て「東風ふかは匂ひをこせよ梅花あるしなしとて春なわすれそと詠じたまひしかばこのうめはるかに飛去て配所の庭にぞ生たりけるされば夢の告有て折人つらしとをしまれし西府の飛梅これ心なき草木までも馴し御別れをしみかなしみけるにや其後御庭のさくらはかれけるとなん此事をきこしめし及ばせて「うめはとひ櫻はかるゝ世中に松はかりこそつれなかりけれさてこそ都の松は御跡を追て西府には生たりけれ追松と申侍るこれとみえたりこの二説にては此歌のよみ人かはりたれど今下の句をばすこしかへて菅家の御歌としたる也

前後不覺にとり亂す

不覺はおぼえずと書てあとさきをもわきまへぬことなり

未練者めと呵付

未練はいまだねれずと云事にて人をさげしむ詞也

異義を正し

異義は宛字にて本字は威義也きつとして行義よきさまをいふ

いぶかしさよ

不審と書ていぶかしとよむ合點のゆかぬ心也それ故次のことばに御不審は尤とうけたり

親兄弟共肉縁切

親兄弟は同じからだ同前なれば骨肉の縁と云也

心の誓

著はうらなひに用る物也それ故ものゝめあてをめぐゝいふなり
迷途の旅

迷の字はあて字なり冥途と書べしくらき道といふことにてあの世へゆく道也

あの子が香奠

奠はそなへるといふ字にて佛前へそなへる香の料に贈る金銀をも香奠といふ也

利口なやつ立派なやつ健氣なやつ

利根と云をあやまりて利口ともいふ也利はさとしと云心根は根性の根の字にてさとき生れつきといふ事也利口とかげば口をきく心にてこゝには叶はず立派ははのたつといふことにて際立こゝろ也けなげの健はすこやかとよむ字ゆゑ氣性のきつとする事を云

同腹同性

梅王松王櫻丸は同じ腹に生れたる三ツ子ゆゑおなじ性分といふ事にて菅丞相の愛し給ひし飛梅追松と都にてかれたる櫻と三木のことをとりあはせて三ツ子に仕立たる所作者のはたらき也

あじろの乗物

あじろは籬際とかいて竹をあみたる物故竹にて製したる乗物をあじろの乗物といふ

白無垢

無垢はあかなしとかきて白くあかつかぬ衣類をいふなり

六道能化の弟子となり

六道は地獄道畜生道餓鬼道修羅道人間道天上道の六ツの道をいふ其六道にまよふものをよく化度するとしてすくひた

すくる佛を地藏菩薩といふこと地藏本願經に出たり爰にては地藏菩薩の弟子となれよと云心也
 劍としてのやまけこへ

刀山とて冥途につるぎの山あること諸經に見えれば今小太郎がつるぎにてころされたる事を此世ながらつるぎの
 山と死天の山とをこえたる事にとりなしていへり此一場はじめに一字千金二千金と書だして末にいろはにて書とめ
 たる事は又作者の粉骨と云べし

○ひらかな盛衰記 無間鐘の齣

爰も名高き難波津に戀の船着數々の多かる中に取分て酒汲かはす神崎の里の色宿千歳屋は

むかしの遊女は船にのりたるゆへ和歌の題に遊女とあれば船のことを詮によむ也それ故こゝにも戀の船着なと書
 たり神崎江口はむかしの遊所にてありし事朝野群載の遊女の記にくはしく見えたり古事談に二條の帥長實水干裝束
 を着て神崎の遊女にいかゞ見ゆるととひたまひし事も見えたり

紅も園生にうゑて隠れなき

この詞謡曲の安宅頼政などにも出たれどいづれの註釋もさだかならずこれはたゞ紅色の花は園の中にうゑてもかく
 るゝ事なくみゆるよしをいひたるものにてさせるより所は有まじき也たとへば虞美人草の名を滿園春といふよし花
 疏にいだせるがごとくたゞ見えたるまゝを云詞成べし

主が答拜

答拜は客が物をいへばそれにこたへてかしらをさぐと云心也

追從輕薄

追従の事は前に注す輕薄の字は杜于美の詩に紛々たる輕薄何ぞ數ふることを須ひんと作りてかるがるしく濼き心をも有様をもしふ也

本^凡の心で淡路嶋

まことのころにてあはふといふ事を淡路嶋といひかけたる也さて又「あはぢ嶋かよふちどりのなく聲にいくよね
さめぬすまの關守といふ歌をとりて千鳥も今はこのさとへとつゞけたり

彼ふかまの源太様に

箕山大鏡に眞夫はおもてむきの買手にあらずして密通する男をいふ眞實におもふ夫といふ事也といへりさればふか
まといふはふかまぶを略せる詞にて深き中のまぶと云心成べし

千鳥に逢が嬉しさに足もいそ〜

磯ちどりといふ詞あるゆゑいそ〜とつゞけたり足もいそ〜はいそぎてはやくありく事也
よふまめゐてたもつた

まめはまめやかといふ心にて實の字なり實は虚のうらにて無事なるころなり

ア、聲が高いかべに耳

詩經に君子易く言に由ことなし耳垣に屬といふ事あり管子にも墻に耳ありといふ語有てみだりにものいふことをい
ましめたるたとへ也

煙くらべん淺間山

富士と淺間はいづれも常にけふりのたつ所ゆゑ煙をくらべんと云ひならはしたる也後撰集の歌に「しなのなるあさ
まの山も、ゆなれはふしのけふりのかひやなからんとよめり今むめがえがきせるのけふりとおもひのけふりとをく

らべんといふ心にかきなしたり

もと某は頼朝卿のゑぼし子

男子の元服のときゑぼしを着せて給はる人より名乗を申うくるゆゑ是をゑぼし親といひ我身その人のゑぼし子といふよし秋草に見えたり

一生埋木となり

水の中に埋もれてあらはれぬ木をうもれ木といふ也古今集の歌に「名とり川せゝの埋木あらはれはいかにせんとか逢みそめけん」とよめり

君傾城に成さがつても

君は江口の君のこと西行の撰集抄に見えたり傾城のことは前に注すいづれも遊女を云也

首尾かぶ首尾か

居家必用に首は始也尾は終なりとありてはじめをはりの都合する事を首尾するといひ不都合なることを不首尾といふ也

奥の吉左右聞迄は

左右はともかくにもとよみて善たよりかあしきたよりかを聞事を左右をきくといふ也こゝにてよきたよりを聞といふことを吉左右と云ひたるは左右の字をひとかたにかりていひたる也

しばし待間も千歳やの

しばしの間をも千年もすぐるやうに思ひて待遠くおもふよし也つれづれ草にあかずをしとおもはちとせを過すとも一夜の夢のこゝちこそせめといひまはこのうちこゝち也

弓矢神の御加護と

加護の字は法華經に出くはへまるとよみて神佛のめぐみをくはへてまもり給ふをいふ也

其敵のけめう實名

義經記（せいけい）にいかなる人ぞ假名實名尋ねて參れといふことあり秋草に云假名といふを今の世には苗字と云假名と書は非なり家名とかくべしといへりしかればけみやうは何氏と云苗字のこと實名はまことの名也

慥なしやうぜきいへ聞ふ

證跡と書て證は證據といふことにてしるとよむ字跡はあとよむ字にて是もたしか成しるしをいふ也

滋藤の弓たづさへ

滋藤は重藤ともかく也しげく藤にてまきたる弓也

面目もなき御對面と

史記項羽本紀に我何の面目あつてかこれにまみえんといふ語有さしむかひてあはす面も目もなしとはぢ入ていふ詞也源氏物語には面目をめいぼくとよませてほまれのある心にもちひたり

世の雜談にいひふらせし

雜は萬葉集にてくさくつとよむ字也いろくさまざまにとりませてしかとせぬ咄しを雜談といふ也

鎧ひたれ小手脚當

冬草に鎧の事を具足といふ具足の二字はよろひたれりとよみて甲も胴も小手脚當もなにかもとりよろひて事足るをいふ也俗に大將の鎧をよろひといひ平士の鎧をば具足といふまた一説に古制の鎧をばよろひといひ近世の鎧をば具足といふと有これらは取にたらぬ俗説也と云

甲打物夫々に箆かきおひ出立たる

上にいふごとくよろひといふ名には外の武具もこもりたる義なれどかやうにつゞけていふ時は鏝はよろひ一ツの名にて小手すねあてかぶとなどゝ別々にいひ立ねば聞えぬ也打物は太刀かたなの類にて鍛冶のうちたる物を云箆うねの事は釋名に矢を盛る器也とあり秋草に逆頰箆葛箆柳箆蜻蛉えびらなと有てさまざまの説をあげたり

筒に生たる紅梅を一枝手折箆にさせば

長門本の平家物語一の谷合戦の段に云源太梅の花のさかりなるを一枝折て箆にさして敵の中へはせ入てたゝかふ時も引ときも梅は風にふかれてさつと散ければ敵もみかたもこれを見て感じける所に城の内より本三位中將殿の御使にて候梅をさゝせたまひて候に申せと候「こちなくもみゆるものかなさくら狩と申もはてぬに源太馬よりとびおりにてしばし御返事申候はんとて「いけとりとらんためとおもへばと申されけると有按するにこの連歌の「こちなくもみゆるものかなといふ句は無骨にも見ゆるものかなといふ心成べし骨なくと書て無骨とよむ故也

今度の軍に花も源太も我先かけん〜とかつ色見せて

梅を花魁とよびて花のさがけといふことは詩學大成に唐詩を引て且百花頭上の魁となすといふ詩を出せりそれゆゑ梅をはなのこのかみとも云しかつ色みせてはかつはすこしといふ心にてすこし色をみする事を云也それを敵にかつことにとりなしたるものなり

鶴翼飛行の秘術をつくし

魚鱗鶴翼とつゞきて陳法にいふことば也魚鱗はうをのうろこのごとくならぶこと鶴翼はつるのつばさのごとくかきなることなり

勇みいさんでたつか弓

瑠
璃
天
狗
卷
之
一
終

たつか弓は手束弓と書て手ににぎる弓といふ事也それをこゝにてはいさみてたち行ことにいひかけたる也

瑠璃天狗卷之二

○新うすゆき物語 清水齋

地主の花見の花衣花をかざりて花麗に

地主權現の社は清水寺の中にあり地主とは鎮守と云ことにて大己貴の命をいはひこむるよし雍州府志にみえたり花衣は端手なる衣裳をいふ玉葉集に「花ころもかさつき山に色かへてもみちの洞の月をなかめよといふ歌粉川の觀音の素意法師に告給ひたるうたとて入たり

轉酌までが男ぶり

轉の字宛字にて本字は漉酌なり漉は酒をしぼる事酌は杓にて汲ことにてこれはもと酒家の奴隷のことなるよし書言字考に見えたり今のりのものをかくものをろくしやくといふは六尺の字の音に轉じて長のたかきものを云糸より細き柳腰柳さくらをこきませて都ぞ春の錦なる

女の腰のほそやかなるを柳腰といふ事は杜子美の柳の詩に恰十五女兒の腰に似たりとつくり家隆卿の柳の歌に「たをやめの春のすかたやこれならんつかしくもある玉柳かなともよめり柳さくらの歌は古今集に素性法師「見わたせはやなき櫻をこきませてみやこそ春のにしきなりけると讀り

木の下影をやどとして

影の字はものうつるかげにてこゝにはかなならず下陰とかくべし此詞は「行かれてこのした陰をやとせは花やこよひのあるしならましとよめる忠度の百首の歌をとりもちひたるなり

大内人も見たまはん

大内は内裏といふと同じこゝろにて禁中の御かたかたといふこゝろ也

春ごとに見る花なれどことしより咲はじめたるこゝちこそすれ

これは詞花集に出たる道命法師のうた也それを薄雪姫の歌としたるもの也

今の世の小町さませう／＼の殿御お氣に入ぬはお道理と

少々の男といふことを小町少將とつゞけたる文句也小町と少將との事は通小町のうたひにはじめて作り初たることにてあと方もなきこと也これは大和物語に小野小町と僧正遍昭と贈答の歌あるよりおもひ付たる物なるべし僧正遍昭俗のときは良峰の宗貞といひて色ごのみの事どもゝ有しが其時は宗貞を良少將といひたるよしかのものがたりに見えたり

濃紅の短冊

短冊の紙の見事に赤きをいふ紅梅の短冊といふも同じたぐひ也

筆ずさみ給ふを見て

なぐさみに物をかくことを筆ずさびと云手なぐさみを手ずさびといひなぐさみに歌よむをくちずさびと云類也

天晴御歌なら御器量なら

あつはれは嗚呼といふ心にて感心する體をいふ

てつとり早ふ

手にとる事の早うといふ詞也

水引通し振よき枝に

たんどくに水引を通す事は短冊のかしらより四分目に穴をあけ水引二すぢを二ツに折りあかき方の前になる様に通すが故實也

よい殿御をて有磯海深き願ひの數々を

ありそうみは海の惣名也普門品に弘誓深如海といふ文あり是は觀音の誓ひの御心は深うして海のごとしといふ心ゆゑかやうにつゞけたり又普門品に若女人有て男を求めんと欲せば則福德智惠の男を生しめんとあるは男の子を求めとする女の事なるをこゝにはよき夫を求むるむすめの心にかへて用ひたり

遠山の腰白々と帶したやうに見ゆるは何

白雲帯に似て山の腰をめぐるといふ詩の句を白樂天としたるは謠の作者のつくりこと也これは具平親王の詩にて江談にみえたり

はげたつふりは元として阿房らしい鼻の下

古文眞寶阿房宮の賦に蜀山元として阿房出とつくり元とははげ山の目にたちたるを云具原好古の諺草に云秦の始皇阿房宮の大殿を作りて民をなやまし終には天下をもうしなふ是至愚のわざなれば日本にて人のおろかなるをあほうといふはこゝに起れりと云さもあらんかしといへり

譏る下からくつさめく

陰言いはれてはなひるといふ諺によれりはなひるとはくさめすること也此ことわざの出所は詩經の終風の篇に寤言寐られず願てこゝにすなはち噓と有て注に今俗人噓はなひるときは人我をいふといへり此古の遺語也と云

つれをまいたは風吹に俳諧の宗匠顔

これも風吹に灰をまくといふたとへによれりたとへの出所は延命地藏經の風に向ふて灰を投ずればかへつて其身を

汚すがごとしといふ文によれり

みづくしたる男の鬢付

古事記に美都々々斯久米の子等と有てわかくうるはしきかたちをいへり

栗田口の住人來國行

城州西の岡に住す其子國俊といふ雍州府志に云山城の國いにしへより巧手あり栗田口の冶工當麻の丞等がうつとこ
ろを上作とす

花 曇

三月比空のくもりてすこし雨のふるを云もろこしにては養花の天といふよし月令廣義に見えたり長嘯の擧白集に
「此ころの世は春雨そふるさとのよしの山より花くもりしてと讀り

大慈大悲の花なれば一枝折て家づとに

慈悲のふかき事觀音經に出たり清水寺の花なるゆゑ大慈大悲の花と云り家づとゝはみやげの事なり

主は誰共しらね共結びとめたる枝ながら

此詞は清輔の袋草紙の人魂の歌の「玉はみつぬしはたれともしらねともむすひそとむるしたかへのつまといふ歌に
よれり

折てお歸り遊ばすは落花狼藉

和漢朗詠集の落花狼藉暮春風といふ詩によりてかけり狼藉の字は通鑑演義に狼草を籍て臥し去るときは雜はりみだ
すこの故に物のたつよこにやぶれみだるゝ事をらうぜきといふと有ておほかみの物をふみちらしたるやうにするこ
とを云也

下もへ計り下紐のまだとけ初ぬ薄雪姫

下もえとは春の若草の土の下にきざしてまだ葉をあらはさぬをいふ續拾遺集の歌に「今よりは春になりぬとかけろふの下もえいそく野へのわかくさともよめり下紐は帯の事なれば下もえばかり下ひものまだとけそめぬとつゞけてとけぬといふ詞の縁をうすゆきとつゞけたるもの

御照覽

神佛もあきらかに御覽あるべしといふ誓ひのこと葉也

驪山の契やこもるらん

玄宗揚貴妃と輦に相のりて毎年十月驪山の温泉にみゆきし明年の春にいたりて歸給ひし事明皇雜錄にみゆ

あふむがへし

同じ歌に一字をかへて返歌する事をいふ

鹿菜の非時も進上

出家の食は正午の時を正食とす少しにても晝過れば非時といふと釋氏要覽に見えたり鹿菜は粗末なる野菜と云事也

あふせは石より忝い

石よりかたき契約といふ事をふくめてかきたり

先非をくひてせんかたも千手の誓影たのむ

先非を悔るとは先達ての不調法を後悔すること千手の誓ひとはこの清水の千手観音の御ちかひにもし嘖り恚る事多く共常にあがめうやまふ思ひをなさばすなはちいかりを離れしめんと説せ給ふ事普門品に有ゆゑ其御かげをたのむといふこと也此影の字はあて字にて陰の字をかくがよし

念彼觀音の御名をとなへ

普門品の偈に或囚禁枷鎖手足被杻械念彼觀音力纔然得解脫と見えたり是はもしとらはれとなりて手がせ足がせをいれられても彼觀音の力を念せば直にかのとははれをゆるされんといふ心也さるによりて國俊も觀音の佛力によつて父のゆるしをうけたく思ふより御名を稱へて漚にうたるゝなるべし

七度結びて親と成

阿難問經に識母の胎に託して凡三十八箇の七日ごとの一つの風吹てかたちを變せしめ三十八箇度の七日にして生るといふ事有それをかやうにつゞけたる物なるべし

巢父といふ唐人の惡事を聞てけがらはしと耳を洗ひし潁川の漚の流をだにけがれしと見し許由が例をまのあたり

蒙求に云許由は潁川の人なり世をうき物に思ひ取て箕山に繕居して年を送りしに堯帝許由が賢なるを知て世をゆづらんとの給ふに許由うき事を聞たりといひて左の耳を潁川の流に洗ひけり時に巢父牛を引て潁川の流れを渡て水飼んとするに許由が耳をあらふをみて此水けがれたりと云て牛を引て歸りたりといふ故事也

陽を欠て左をさげ陰に旺じて右を上金尅木に命を斷火尅金に世を亂す

左を陽とし右を陰とす陽をあげ陰をさぐるが順なるにそれを逆にすりたるをいふ旺の字はさかんなりと云字尅の字はそこなふとよむ字にて金は木をそこなふもの火は金をとらかすものと云事にて是を五行の相尅といふなり

思ふまゝに調伏し

調伏とは惡靈などを祈りふせる事なるを俗には咒咀ことにあやまれり

後覺の爲ちと拜見と存て

後覺は宛字也後學と書へし後々の心得の爲に見ておきたしといふこゝろなり

聊爾なされな

聊爾の字は山谷の詩に且然聊爾耳とあり詩箋には聊は且暮之辭ともありてはやまりて輕々敷する事を云

息災に罷在

息災はわざはひをやむると云心にて佛書に出たる字なるを息災延命といふ事よりあやまりて人の無事堅固なる事を

いふ詞に遣ひ來れり

先お歸りと挨拶すれば

挨拶は推也と注のある字挨拶は逼る也と注したる字にておしつけせまる心なるを人をあしらふことには用ひ來りたるは

あやまり也

六波羅での意趣などゝ

意趣の字は小學に出たる字にて註に趣は旨趣也と有て意のめあてをいふ也それを今は意趣遺恨とつづけてかわて心に思ふうらみの事にのみ思ふは誤也

五輪の五つ輪五體の桶がは

佛書に五輪は地水火風空あつまりて人の體となることをいひ五體は筋と肉と骨と皮と毛とをいふそれゆゑ五輪五體とつづけてもいへりそれを今桶の輪と桶の皮とにたとへて云也

大地は忽泥の海ふかくをとらじと

泥のうみといふより海の縁語にて深くといふこと葉を不覺にかよはせたり

こゝに死骸の有ぞとはいかでしるべきとよみたりし歌の中山こゝろざし

清閑寺縁起に云むかし清閑寺の眞慈僧都といふ人すみけりある夕ぐれ門口にたゞすみて行かふ人を見らる折ふし

髪かたちめてたき女のたゞひとりゆくを見て忽愛心おこりければ物いひかくべきたよりなくて清水への道はいづれそと問ければ女「見るにたにまよふ心のはかなくてまことの道をいかでしるべきといひ捨てやがて姿を見失ひけり女は化人にて侍るにや其歌よみし所を歌の中山といふとありこゝの詞は此歌によりてつゞけたる也

○同 切腹の段

見る石のおもてに物もかゝざりし竹のやうじもつかはざりしにとむしつをかこつ菅家の御詠歌

これは菅家の御詠にはあらず夫木集伸正の歌に「偽の名をのみたてゝあひみぬはすゝりの上のちりやふきけんといふをあやまり傳へし也今もすゞりの塵をふかぬものといひ傳へたる事ふるき事なるべしすゞりを見る石とよみたる歌は逍遙院殿の雪玉集硯の歌に「すみ筆をさそあた物とみるいしのおのれしつかに世を過しつゝとありむしつをかこつとは無實とかきてまことにはなき事をとがに落されたるをうらむ事なり

関邊兵衛の籬中お梅の方の物思ひ

秋草に云貴人の妻を御籬中といふ事みすの中におはしましてかるくしく人に見え給はぬこゝろにていふなるべし
 されども古書にはこの稱見えずとあり

花むすびでもついまつても

花むすびとは打ひもをいろ／＼の花のかたちむすぶこと也是は袋などの口をむすぶに一通りにむすびおけば誰ぞ外の人がほどきて見ても又もとのごとく結びおけばそれとしれぬ故わが心えたるむすびかたにてさま／＼の花などにむすびおく時は外の人のみだりに明るることのならぬ爲にこしらへたる結びかた也この結び方は雅遊漫録にあらあらしるせりついまつは歌がるたの事にて伊勢物語のいせの齋宮の「から人のわたれとぬれぬえにしあればといふ

上の句をさかづきのさらに書て出し給ひたる業平「またあふさかのせきはこえなんといふ下の句をたいまつのみにてかゝれしよりかく名づけたる也ついまつとたいまつとはつとたと五音通じて同じ事也

金輪ならくの底までも

佛經に大地の厚さ一百六十萬由旬ありてその底を金輪際といふととけりまた捺落は地獄のことなれば金輪ならくとつとけたり

旅の調度を取したゝめ

調度は道具の事也源氏物語などに多く出たり

殿を下主人はしれた事

下主人は宛字也東鑑には下主人とかけり然れども本字は解死人と書

心ぼそさはよる糸のわかれ／＼て

古今集貫之の歌に「糸によるものならなくにわかれちの心ほそくもなりまさる哉とよみたる歌をよくとりなしたり裁斷の氣づかひなし

裁はものをきりわけさばく事斷はことわりとよむ字にて理をたゞす事也

うががにうに方便をめぐらし

入我々入と書て入まじりてわからぬことなり是も經文に出たること也

定まる過去の因果じやなと

佛經にあまた見えたる事にて前生にてなしたる罪の因ところをこの世にて果すといふ心也
ひきやうな詞必々おいやるな

卑怯とかく也卑はいやく怯はおそるゝとよむ字にて心いやく臆病なること也
不祥くうなづくばかり

不祥は老子經に出たる字にてよからぬ事也また古事記には不祥をふさはずとよませて是も心よからぬこと也又日本紀には不祥をさがなしとよませてさいはひなき心也

娑婆に名残がおしいか

娑婆とはもろくの衆生の三毒諸煩惱をこらへうくるといふ事にて世界の物名なるよし名義集にみえたり

親にも永離三惡道

永く三つの惡道をはなると云經の文也

いな事を時宜する人

物を辭退する事あるひは人に禮をするを時宜といふは禮記に禮は宜しきにしたがふと云ひまた禮は時を大なりとすといふ語によりたるものなるべし

六道の門出

六道は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天生をいふよし大藏法數に見えたり

虎溪の三笑と名に高き唐土の大わらひ

晋の惠遠法師廬山の東林寺に住せられけるに陶淵明と陸子靜とゆきて是を訪ふかの二人かへる時遠公つねには此山門を出ざるに彼二人をおくりて虎溪といふ谷を思はず打過て三人ともに大に笑ひし故事也晋書にいづ

○同 道行

旅立に日のよしあしをゑらばぬは落人の身の常なれや

この枕の文句作者竹田小出雲深く案じてつくり出せしが其とき父千軒奚疑江戸に有けるにわざ／＼飛脚を以てこの道行の文の添削を江戸まで乞にやりし也奚疑これを見て此まぐらの文句のかたはらによろしくといふ褒美の詞を書そへてかへしける故其まゝ芝居へ出せしとぞむかしの作者はかやうの枕の文句などにもことの外骨を折し事感すべしこれにつけて思ひ出るにちかき世には近松半二忠臣講釋のおりへと傾城うきはしとの出端の詞に加茂川と井地の小川を月やとる流れは同じ二人づれといふ文句を九日が間案じてつゞりたるよし也誠に傾城と立君と二人連の出端をよく書とりたりといふべしこれらの事を思へば今の作者は文句などの事は意外のことにおもふなるへし

はんちや合羽も

秋草に云合羽といふものは古代なき物なりむかしはみのを着たる也今世簑籠とて行列にもたするも簑を着たるゆゑかの籠をみの籠といひならはしたる也慶長のころ阿蘭陀國の人商賣のために日本へわたり來るに彼おらんだ人の上に来たる衣服に袖もなくすそ廣きものあり其をか國の人の詞にカツバといふ也此方にて其カツバを似せて紙にて作り油を引てカツバと名付たると也今の坊主合羽といふもの也阿蘭陀に用ゆる文字は此方の字とは違たりさればカツバと云字しれず合羽の二字はこの方にてあて字につけたる也と有按ずるにはんちや合羽は半合羽のこと成べしものゝ半なることを半チヤと俗に云ならはせりこれはなから半着といふ俗語の轉じたるにやされば半着の字なるべし

かつら男の

かつら男とは月の中にある桂の木をきる男といふ事にてその名を吳剛といふよし酉陽雜俎にみえたり

思ふ思ひはますらをがやたけ心も

思ひは増といひかけたりますらををは壯夫と日本紀に書てこゝろたけき男のこと也これ故やたけ心とつゞけたり

○義經千本櫻 狐之齧

鶯の聲なかりせば雪きへぬ山里いかで春をしらまし

捨遣集に出たる中納言朝忠の歌也

ことちにたつる雁がねも春を見すてぬ心ざし

空をゆく雁のつらを琴柱に見たてゝ雁は都の春をみすてゝこしちにかへる物なるに川つら法眼が義經公を見捨ぬ心

さしをほめたることば也

疎略なき心底

疎略の字は漢書の司馬遷が傳に出て疎はうとく疎遠なること略はものをざつとする事也こゝにては法眼が深切なる

心をいふ

いぶかしげにうけ給はり

韓詩外傳に不審と書いていぶかしと讀せたり不審に思ふ心也

破傷風のやまひとなり

金瘡の疵口より風を引て筋なと引つりなやむを破傷風といふ事外科正宗に見えたり

我きせながを汝にあたへ

着春長とかいて大將の着し給ふ甲冑の通稱と書言字考にみゆ

ひやうはくしてもうつけぬ義經

飄泊と書て船のたゞよひながらかゝりある體をいふ

引くゝつてめんはくさせよ

面縛とかいて左傳に出たる字也註に兩手を後に縛てたゞ其面をみる也と有

がうもんしていはせふか

拷問とかく也字彙に拷は打也と有てうちたゞきてせめとふ事也

忠信殿御出也と奏者が聲に

宗五記に云公にては申次と云私にては奏者と申也とぞ是室町家の時の事也海人藻芥に云近日頭人等内々の取頭を奏者と稱するは傍若無人のこと也奏の字天子に限りて云事也然は則關白以下諸家に物申者申次と稱すべしと云々

何にもせよ子細ぞあらん

子細はこまかなる事也北史の源思禮が傳に政をするには大綱を擧べしなんぞ必はなはだ子細ならんと有こゝにてはこまかに入組たるわけ有べしといふ心なり

へんしも早く

片時もはやく也

もくして様子をうかゞへば

黙してはものをもいはずといふこと也

りんゑぎたなきふるまひならねば

輪廻は佛教に出たる字にてつきまとひてはなれぬ事也ふるまひは舉動と書て人のたちふるまひの事也

げんくはん長屋所々方々

支關の事秋草にはく古代武家に支關なし佛寺には支關ありし也三光院内府記に云壁龕は諸山門前において棄去な

り但し東堂は玄關に於てこれに乗る也と云々諸山といふは諸寺のこと也諸寺に玄關あることをしるべし武家には玄關はなしといへり今按ずるに玄關の字は傳燈錄に出て惠海和尚の詞に玄關を啓くと有て佛道の深き心を説ひらくを云也

忠信のかいほうだけ

介抱はたすけいだくと書てかゝへたすくる事をいふ也

しんきしんくをなひませのしらべむすんでどうかけて

辛氣辛苦とはしづかゝ心遣ひすることをいふそれを眞紅の糸にてよりたるつゞみのしらべにいひかけたる也

手じなもゆらに打ならず

神代紀に手玉も玲瓏に織紙少女はこれ誰むすめぞやとありまた萬葉集に「あしたまも手たまもゆらにおるはたをきみかみけしにぬひあゑんかもといふ歌も有て手だまはずなはち手じなにて女の手じなのやさしきかたちをいふ也

こゑせいゝとすみわたり

つゞみの聲の清々ときよくすみわたる也

しんにをすますめう音は

李太白詩集に南窓蕭瑟松風起憑誰一聽清心耳と作れりこゝにてはつゞみをきくに心も耳もすますほどの妙音ありといふこゝろ也

かのらくやうに聞へたる會稽城門の越のつゞみ

此書は白孔六帖に云會稽の雷門に鼓あり白き鶴飛てこの鼓の中に入たり洛陽の人そのこゑを聞て是をとらんとするに鶴たちまちとび去たりとあり

聞入聞あるよねんのでい

つゞみに聞入て餘念なき體なりよねんのでいにてはこと葉たらず

油斷を見すまし

油斷といふ事は涅槃經に出たるたとへにて國王一人の臣下に勅してひとつの油の鉢をもたせて道を行しめすもしかの油の鉢をかたふくことをゆるさずもししづくにても其油をこぼさば汝が命を斷べしとてまた一人をつかはして刀を拔しめ油をもちたる臣下のうしろより是を怖さしめばかの人心をつくしてかの油鉢をもちかためんといふ事にて油によつて命をたつと云事を油斷と云ならはしたる也

たゞひれふしてゐたりしがやう／＼にかしらをもたげ

ひれとは領のこと也かしらをさぐれば領もうつむけにふすゆゑひれふすとはいふなり

からすは親のやしなひをはごくみかへすも皆孝行

からすを慈鳥と云また孝鳥といふ反哺とてからすが成長すれば鮮しき食物を得ては口に入て腹にいれずはきかへして其親鳥にくはしむること禽經に見えたり

ぐちむちの畜生も

愚癡はおろかなる事無智はちゑのなき事也

千年こうふるいとくには

却を歴るといふことにて佛書に一世を却とすとあればよをふると云心なり

八百萬神とのゐの御ばん

やをよろづの神といふ事にて古事記に出たり日本紀には八十萬神とかいてやそよろづの神とよませたり八百といふ

も八十といふも數多きことをいふ詞にて天照大神の外の神々のあまたまします事をいふ也とのゐの御ぼんとは其數
數の神たちが禁裡を守護したまふ心なり

いんぐはの經文うらめしく

因果經にある文言といふこと也

五臟をしぼる

心の臟肝の臟腎の臟肺の臟脾の臟これを五臟といふなり

頼もつなも切はてしは

是は頼みのつなも切はてしといふべき詞也頼みもつなもといへばたのみとつなとが二ツに成てこのつなは何の綱と
もしれぬものになる也頼みのつなといへば頼みにする心を綱にたとへたる心なり此ことばこゝに限らず所々に出る
詞なれどもいづれも頼みもつなもとありててにはを誤まれり

かほどごういんふかき身も

業は前世の惡業因は前世の因縁也

りんゑのきづなあいじやくのくさり

輪廻の紐はたえずつきめぐる執心をつなにとへ愛着のくさはりは恩愛に執着を鑿にたとへたる佛語也
そもいつの世のしゆくじうにて

宿習と書て前世よりなれ來りたる業因といふ佛經の語なり

我てんべんのつうりきにて

轉變はうつりかはる心也狐の通力にてさま／＼にばける事を云

けいしやうひじゆつはゑたりや得たり

輕捷はかるくはやき心也はやわざの秘術はきつねの得ものといふこゝろ也

くはいりよくらんしんをかたらずといへども

論語に怪力亂神をかたらずといふ事有あやしきことなどは聖人のたまはぬことなれ共といふ心也

あたかもふせつを合すがごとし

符節を合すがごとしといふ事孟子に出たり符節とは竹のわりふの事にてすこしもちがはずあふことのたとへ也

よきけいりやくござんなれ

よきはかりことこそあるなれと云詞也その二字をあつめていふ時はさの字と成ゆゑこそあんなれといふことをご

ざんなれとつとめて云也

じんとくあつき御詞に

仁徳と書て義經の人をめぐみ給ふ徳の厚きことをいふなり

御はかせをたびてける

御はかせは君のはかせ給ふ御太刀といふこと也日本紀にみかどの御手にとらせ給ふ弓を御執といふにおなじ心也

ゆかもひゞけとづでんどう

頭轉倒と書かしらのひつくりかへる事也

命おしさに骨折はくろう九郎と

苦勞九郎と詞をかさねたるなり

らうたげなる御すがた

らうたげはけだかくおとなしやかなるかたち也源氏物語にあまた有詞也

玉體のまします事

天子の御身を玉體と申なり

にぎりつめたるたなうらに

たなうらは手の内也足のうらをあなうらといふ

龍顔にあはせ奉るは

天子の御顔を龍顔といふ事史記に見えたりすべて天子の御事を龍にたとへていふ故御怒を逆鱗と云也逆鱗は龍のうろこをさかだてる事也

のり經が隠れがへせんかうあれ

天子の御座をうつさるゝ事を遷幸といふなり

うき世をうしの車ともしろしめされとそうしつゝ

うしの車はうき事を牛といふ字にかけて車に轆と云もの有ゆるこの長柄の長刀を牛に引する車とおぼし召れよと云こゝろ也

供奉のけがれ思はずば

みかどの御供申す事也

上にはのり經ゐだ天立見くだす限かど立て

韋駄天は諸天傳に韋天將軍とも有其傳に云天神姓は韋諱は現南方天王八將の一臣也と有讚の詞の中に熏修の所威權を現す共頭頂の金兜寶杵をよこたふとも有

ぎやうがうの道をさへ

當今のみゆきを行幸と申仙洞のみゆきを御幸と申也

しゆらのもうしう散ずる道理

修羅道に墮たる繼信が妄念執心を散ずる道理といふことなり

庄園を申くだして得さすべし

愚明抄に庄園は田島也と有榮花物語に御堂關白道長公病中に法成寺へ庄園おほく寄附せられたる事見えたり

すはやと見ゆるふくしんにわけ入なだむる源九郎狐

腹心のうちへわけ入るは狐の性にえたるものなるべし

君々たれど臣々たらず

君々たり以て臣たらずんばあるべからずと云論語の詞をとれり

けいひつの聲高々と

警蹕とかく也さきをおふともみさきをはらふとも文選によませたり前漢書には王者出るときは警し入るときは蹕す

人を止め道を清ふ所以也と有

川つら法眼せんくの役

前駟とかいてさきばらひのこと也

銀魚帶

金魚帶銀魚帶とて貴人のおびものにて魚符とも云二ツにわかつてわりふともする物也唐書に出たり

○愛護稚名歌勝鬨 道行

あふことは猶かたいとのよるとなく

片糸はよりをかけぬ糸也それ故古歌にもかたいとのよるとつゞけて糸をよることを晝夜のよるにいひかけたるが多
きなり千載集の戀のうたにも「夢路にもあふとし見えはかたいとのよるたにやすくねなましものを」とよめりこゝ
の文句は愛護若にあふことはなりがたきといふ心をかた／＼によりあはさぬかたいにいひかけて其糸のよるとも
ひるともわかぬ鬨の内とつゞけたり

床の海

これも戀の歌になみだの事を袖のうみとも床の海ともよみたればこゝも鬨のうちにて泣あかす涙に床も海のやうに
なるといふ心也

うきねの鳥か鳩てる姫

うきねとは水鳥は水に浮て寐る物なれば床のうみにうきて寐る鳥とつゞけて其鳥の中に鳩鳥といふ物があるゆゑそ
のやうなるにほてる姫の有さまぞと云心也

過し競馬の折からに

五月五日賀茂のやしろにてあること也此日は多く見物の人々立こむよし長明の四季ものがたりに見えたり

帥の阿闍梨

帥とは出家の官名にてあじやりは天竺の詞に出家にてよく弟子の身持をたゞす人をいふよし釋氏要覽に見えたり
いとゞ思ひのまさり草

まさり草は菊の異名にて寛平菊合に「すへらきの萬代までにまさりくさたまひしたねをうゑしきくなりといふ歌見
えたれどこゝにてはたと思ひのまさるといふ事にきかせたり
なれしふすまの驕に

此ふすまは彘の字にて夜着ふとんの類をいふなり

母のいさめや世の人のそしりも何のわきまへも

いさめは諫の字にて折檻異見などするを云こゝの文句につれ、草の萬にいみじくとも色このまざらん男はいとさ
うざうしく玉のさかづきのそこなきこゝちぞすべき露霜にしほれて所さだめずまどひありき親のいさめ世のそしり
をつゝむに心のいとまなくと書たる文によりて戀路の切なるさまをうつしてなんのわきまへもまだ知らぬといふこ
とを白川の橋にいひかけたたり橋柱ははし杭のこと也

波のあわたつ山つゞき

是は粟田山のことをいふ古今集にあはたといふ事を隠し題にしてよみたるあやもちの歌に「うきめをはよそめとの
みそ見つゝ行雲のあはたつ山のふもとにといふ歌ありそれを今こゝにはしら川よりつゞけて波のあはたつ山と取か
へてつゞりたるなり

我たつ山の山おろし都の富士とながめやる

わかたつ山とは叡山の事也むかし傳教大師えい山中堂建立のとき柚木をきらせ給ふとて「あのくたら三藐三ぼだい
の佛たちわかたつ山に冥加あらせたまへ」とよみ給ひしより此山をわがたつ山といふよし無名抄に出たり又都のふ
じといふ事は伊勢物語にするがのふじの山のかたちをいふとてこゝにたとへばひえの山をはちばかりかさねあげ
らんほどしてとかきたるにつけて叡山をみやこの富士とは云ひならはせりそれゆゑ後撰集の歌にも「我戀のあらは

にみゆるものならば都のふじといはれなましをとよめり

麓は鳩の朝霧や袋を出る琵琶の海

叡山のふもとは近江の湖水なればつき／＼そのけしきをいへり此みづうみを鳩のうみとも鳩てる海ともいふ琵琶の海といふことは此湖のかたちびはに似たれば名づけたる也こゝに袋をいづると書たらは朝霧のひまより湖の見えたる所が袋の口をときて琵琶をとり出したるやうにみゆると云こゝろ也それ故たが糸かけて引あみ共續けたり

千舟百舟帆をあげて

近江八景のうたに「雲はらふあらしにつれて百船もちふねも波のあはつにぞよると讀たるによれり

さつささゞ波しがの浦むかしながらの花園の

千載集よみ人しらず「さゞ波やし賀のみやこはあれにしをむかしながらの山さくらかな

加茂の葵の二葉山

加茂の葵祭の日のことをいふとて葵の二葉山とつづけたりあふひはふた葉なるものゆゑ加茂やまをふたば山ともいへり

狩装束の花やかさ袴は精好水干は此秋の野の草づくし

狩装束は鷹狩の装束也此袴は奴袴とてくゝりを高くあげらるゝ様に仕立る也それ故やつこと云字を添へて奴はかまと云と秋草にいへり精好はよきうす絹也水干はひたゞれの様成物にて紗にても平絹にても拵るよし装束拾葉抄にみゆわれもかうは漢名を地楡と云薄の様にて紫色の花咲草也

鳴てさわたるあの鴈がねも

さわたるは早くわたると云事にて秋のはつ鴈をいふ也早の字をさとよむ事は早苗早蕨などにて知べし

あふはわかれの始ときけど

會者離之始といふこと白氏文集に見えたり

ちにまじはる神心

これはもと老子經に其光を和らげその塵を同じうすといふ事有之我智恵をかくして人に見せぬを和光といひ世にしたがひて塵の中にまじはりて時をしるを同塵といふ心なるゆゑ神の御心の其やうなる物にて世の人を守らせ給ふに光を隠して塵に交はらせ給ふ御めぐみを云也

○同 山の段

かくとはいさや神ならで

いさとは不知と書て神ならねばかくともしらずといふこと也

佛につかふ闍伽の水手に携へて岨づたひ心細道たどらるゝ

天竺にては水をあかといふこゝにあかの水と書たるは重言也携へるとは手にさげること也岨は山のがけのやうなる細道なりたどらるゝとはしらぬところを行はくらがりをありくとて手にてさぐりさぐりありくやうなるものなれば物の覺束なき事をたどると云也たは手の字にて手取と書也

今のわが身の境界と

境の字も界の字もさかひとよむ字にて身分と云と同じ心也

早中堂に勤行のはじまるしらせ

中堂は傳教大師の建はじめられし堂なり勤行はつとめおこなひと云こと也

戀しき人を慕ひては劍の山にもものぼるといふ

地獄に刀山劍樹有てかの山の上にわが愛する所の婦女あるゆゑに男子これをみてかの山にのぼるに樹木の葉刀のごとくにてことごとく其身體をやぶれども其をもいとはず山の上に登りて見ればかの女はまた地にありていふ何とて早く來りて我を抱きたまはぬといふ故かの男又刀山を下れば劍樹の葉又下にむかひて彼男の五體をきるといふ事縁伽論に出て邪淫の罪をあらはせり

震動雷電はたゞがみ

震動はふるひうごくともよみ雷電はかみなりいなびかりとよみてかみなりのおびたゞしく鳴ひゞく事也はたゞがみは霹靂とかきてかみなりの鳴はためく事也

ふたゞびのぼるつゞらおり

つゞらをりは九折とも羊腸坂とも書てはげしくまがりくたる坂道のこと也

空には磐石

そらよりいしの降ことく大風がいはをもとばすなり

魔障の業

魔は悪魔障は障礙の事にてあしきものがさゞはりをなして山へのぼらせぬこゝろなり

氷の雨は大ぐれん天狗つづての等活地獄骨もくだかれあなうらを

入大地獄の中にて大紅蓮とて寒氣の身を責る所と云よし翻譯名義集に見えたり等活地ごくは罪人たがひに害心いできたまゞ相あふ時はたがひに鐵の爪を以てかきやぶり血肉すてにつきて骨ばかり残るとき獄卒鐵杖鐵棒をもつて打くたき身體ことごとく粉のごとくなる時すゞしき風ふき來ればものとごとく人の形の活かへり又たがひにかき

つかみてくるしみをうくる是を等活ぢごくといふよし往生要集に見えたりあなうらは足のうらと云事也

瑠璃天 狗卷之三

○妹背山婦女庭訓 山之齣

古への神代の昔山跡の國は都の始にて

いにしへは往し方と書て過行しかたをいふ也神代のむかしとは神代紀に陰陽始てみとのまくばひして夫婦となりこ
うむ時先濛路洲を以て胞とすすなはち大日本豊秋津洲をうむと有をいふ下學集に云山迹はすなはち大和なり日本の
惣名也日本紀に天地開けはじまりし時人みな山に住む其地いまだ堅からずして人のあと見ゆ是をもつて山迹と云と
有また日本六十餘州最初に大和州出生す故に日本の惣名を大和といふともあり又大和をみやこの初といふ事は神武
天皇東征したまひ六年の後倭をやまとの國畝傍山の東南攝原の地に相てはじめて帝宅を經始たまふ都を建ることこ
のときに始るといふこと舊事紀に見えたり

妹背のはじめ山々の中を流るゝ吉野川

拾遺集の神樂歌に人丸のよめる「おほなむちすくなみ神のつくれりしいもせの山を見るそうれしきと云歌と古今集
よみ人しらすの「なかれてはいもせの山の中におつるよしのゝ川のよしやよの中といふ歌とによれるなるべし
實世に遊ぶ歌人の言の葉ぐさのすて所

ことのはぐさとは和歌をいふ也新編古今源範政歌に「よしあしを君しわかすはかきたむることの葉ぐさのかひやな
からんとよめり

大宰の小貳

官名なりむかし筑前の國に太宰府といふ役所を置いて外國の要害としたまへり宰はつかさどるとよむ字にて後の世の管領職とおなじ事也其太宰府のおも役を太宰の帥といふ其下役を大貳小貳と云なり太宰の小貳は五位の諸大夫にあたるよし職原抄の註に見えたり

大判事

大判事は武官の名にて罪科の輕きと重きとをわけしるしてさまざまの争ひごと訟へ事を判斷してさばく役なるよし令義解に見えたり位は正五位下にあたりて此下役に中判事少判事といふも有也この事は職原抄に見えたり

妾に勘氣の山住居

貝原好古の諺草に云俗に君父の怒に逢て閉居するを勘當にあふたるといふ是は其罪の科を勘へて輕き重きの律に當ることなるべし唐書に勘當に暇あらずとありと云々按ずるに勘當のことを清少納言の枕草紙には勘事と書てかうじと讀せたり今勘氣と書は父の勘當の氣色をはかりて山住居するといふ心なるへし

經讀鳥の音もすみて

鶯が法華經とさへづるといひならはせし故にうぐひすを經よむ鳥と書なしたる成べし

氣を慰めの雛祭

ひいなあそびの事は源氏物語もみぢの賀乙女野分などの卷々に見えたれど今のやうに三月三日九月九日にばかりまつる事にはあらずちひさき人形をこしらへ小さき家などをつくりて常にもあそぶをひいなあそびと云也野分の巻に雛の御殿をひいな屋とも書たり按ずるに此雛といふ字はもと鳥の子のことなるゆゑすべて小さき物をひなといふなりすべてのものゝかたちを十分一にちひさくこしらゆるをひながたといふもこの義也漢土にて小僧を雛僧といひ小妓を雛妓と云も同じ心也

桃の節句の備へもの

日本にて三月三日曲水の宴をはじめて行はれし事は顯宗天皇の元年なるよし日本紀に見えたり漢土にては韓詩外傳の註に三月桃花の水盛にながるゝ時にあたつてもろくの士あまたの女と鬪を執て邪氣を祓ふ鄭の國の俗として三月上巳の日はをおこなふよし見えたりよつてこの日を桃の節句と云ひならはしたる成べし

柳の楊枝はしちかく

楊はやなぎといふ字にてもと楊枝といふものは皆楊の枝にてこしらへたる物也釋氏要覽に楊枝を嚼に五ツの利あり一には口苦からず二には口臭からず三には風を除き四には熱をのぞき五には痰癢を除くと有今こゝに柳の楊枝といひたるは重言の様なれど杉やうじ竹のやうじなど云事あれば苦しからず

御中ふ和の關となり

ふ破の關は美濃の名所にて千載集大中臣親守の歌にも「あられもる不破の關屋にたひねして夢をもえたそとほさざりけれとよめり此關の名を不和の字に通はして書り

よもやいなとは岩はしの

葛城の一言主の神久米の岩はしをかけおほせずしてやみ給ひしゆゑわたる事こそならずともと云ひかけたり千載集師頼の歌に「かつらきやわたしもはてぬものゆゑにくめのいははしこけむしにけりとよめる心也こゝに大和の名所を取出したるは作者の働也

念悲觀音の經机

念彼觀音と書て彼觀音を念ぜば釋然として解説をえんといふ觀音經の偈によれり念悲と書はあやまり也からりと川に落瀧津

おち瀧つは山川の流れ落てたぎる心也古今集忠岑の歌に「落たきつ瀧の水上年つもり老にけらしなくろきすちなしとよめり

返事を松浦佐用姫の

これは萬葉集の「遠つ人まつらさよひめつまこひにひれふりしよりおへる山の名といふ歌によれりひれは領のことにて夫のゆきかたを見んと領をふりてながめやりたるまゝにて石になりたる故事也こゝにひれふす山とつゞけたるは誤り也ひれふすはうつふけに伏ふこと也

善か悪かを三柏水に沈めば願ひ叶はず

柏の葉を水にうけて物をうらなふにしづめば願ひ叶はずうけば願ひかなふといふこと有續古今戀の部小侍従の歌に「おもひあまりみつのかしはにとふことのしづむにうくは涙なりけりとよめり

吉野を假の御祓川

御祓川はみなづきはらひをする川をいふ此吉野川をかりに御祓川としてこゝより大神宮を拜せんといふ也柏にみきをのせて大神宮にさゝぐることは夫木集仲房の歌に「むかし誰みつのかしはの盃を天照神に手向そめけんとよめり朝拜といふは清涼殿の前にて臣下の天子を拜する事をいふよし花鳥餘情に見えたりこゝは遙拜といひてよき所也朝拜と書るは誤也

いふに嬉しさ雛鳥の飛立計り振袖も

この詞よくつゞきたり萬葉集に「よの中をうしとやさしと思へとも思ひたちかねつとりにしあらねはともよみうちはふき今も鳴なんといふ歌を萬葉には打羽振と書たり鳥が飛んとする時はふたつの羽ねをふるゆゑ也こゝに飛立ばかりふり袖と書たるよく叶ひたり

吉野の川に鵲の橋はないかと

銀河に鵲の橋をかけて一年に一度織女をわたすといふこと淮南子にあるゆゑ此吉野川に橋はなきかとうらむ心也
籠鳥の雲井をしたふ

此故事菅原にしるす

空にしられぬ花ぐもり

花ぐもりははなの比空の曇りてすこしふる雨也この心新古今戀の部に「なに故にながむる月のくもらん空にしられぬ袖のしくれをといふ歌にかなへり

心の峻岨刀して削るが如き物思ひ

峻岨は山のけはしきかたちにて刀をもつて削り立たるやうにするどきを云今大判事がわがこゝろの苦しさが刀にて削らるゝやうなりとたとへたり此詞は朗詠に山復山何れの工みか青巖の形を削りなすとも見え又遊仙窟の高き嶺天に横たはつて崗巒の勢ひを刀して削れりとあるにもよれるなるべし

清澄も一楫し

楫の字は漢土にては人にむかひて禮をするとき手をわが胸にあてることをいふ也日本にては手をさげて挨拶する事に用ゆ

けふの役目の落去次第

落去は落着といふに同じ去の字は宛字にて本字は落居とかく事下學集に見えたり和文にも氣のおちつくことを心の
おちゐると書は此落居の字なり

母に勸て入内させ

入内とは公卿の御むすめのみかどへ御よめいりなさるゝを云大内に入といふ心にて入内とかく也
 遺恨に遺恨を重ねるか

遺恨の字は杜子美が詩に出たりのこるうらみをいふ心也

覺東なくも呼子鳥

「をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥かなといふ古今の歌にてかきたり

胸は眞紅のふさがる箱

眞紅はくれなるの色也ひもの流蘇ながきを塞るむねにいひかけたたり

鞞聞に達し

天子の御耳に入るを鞞聞といひ御意を鞞慮といふ也

一天の君

天下に一人の御あるじ故天子を一天の君といふ也

此花は八重一重

八重櫻と一重ざくらと二ツの花をいふ也むかしはさまざまのざくらはなくして一重のやま櫻ばかりなりしかば奈良の都にある八重ざくらといふ千重の櫻が甚だめづらしかりしゆゑ禁裡へさゝげられし時「いにしへのならの都の八重ざくらけふ九重に匂ひぬるかなと伊勢大輔もよまれたり今の世に楊貴妃躡釜車がへしなどさまざまの名の多くなりたるはみな人作にてかのやへざくらをさまざまに變ずるやうに手入して咲かせたるなり契沖の漫睡集に今のよのざくらをといふ詞書有て「八重ざくらならのみやこの一木より枝にさえだに花ぞわかるるとよめるも後世花のかずおほく成たるをいふなり

九重の内に侍^{わづ}かるゝ

こゝのへは禁中をいふ傳かるゝは大切にせらるゝことをいふなり

義理の柵せき留ても

しがらみは塘を水にてくづさせぬやうに河ばたに木や柴やをからみつけておくを云なり

馴ぬ雲井の宮づかへ

雲井とも雲の上ともいふ皆禁中の事也

けふより内裏上臈の

上臈とは女御などの御事をいふ下臈とはまた其下の更衣などの御方をいふ也

別れの櫛のはかなさも

くしの齒といふことをはかなさもとつゞけたり別の櫛のことは源氏ものがたり櫛の卷に六條の御息所の御娘伊勢の齋宮に立給ふ時御こゝろうごきて別れのおほんくしたてまつり給ふいとあはれにてしほたれさせ給ひぬと有これは齋宮としていせの大神宮へ宮づかへにまゐり給ふかの御むすめのひたひにつげの御くしをみかどの手づからさゝせ給ひてふたゝび京の方へかへらせ給ふなど仰ごとあるが例なれば別のくしといふなり

何樂しみの女御后

天子の御妻を后と申それに次たる女官を女御といふよし花鳥餘情に見えたり周禮に女御は御妻也とあれば漢土にて

も重き稱號也

十二一重

これは五ツ衣と同じ事にて古代十二一重といふことなし源平盛衰記の女院の海に入せ給ふ所に彌生の末なれば藤重

ね十二單の御衣を召しといふことはじめて見えたるよし年山打聞にみえたり
一ツに落る三ツ瀬川

十王經に亡人の葬頭川をわたるに三ツの瀬有て一に山水瀬二に江深淵三に有橋渡といふとあり是によりて歌にも三ツ瀬川ともわたり川ともよむよし古今集の古抄にみえたり按ずるにこの十王經は偽經なれどもふるくこの經によりて歌にもよみ來れる事おほし

子よりも親の四苦八苦

四苦とは生苦老苦病苦死苦をいふ八苦とはこの四苦の上に愛別離苦怨憎會苦求不得苦五盛陰苦を合せていふと大藏法數にみえたりこゝにては只種々の苦しみをいへり

西方淨土

極樂のことなり

殘らず川へ流れ灌頂

眞言宗の法事に灌頂といふ事あり延暦二十四年高雄の道場において行はるゝよし日本後紀に見えたり流れくわんでうは經木を川へながす事にて職人歌合に「いかにせん五條の橋の下むせひはてはなみたのなかれかんしやうといふうたあり

水に成たる水葬禮

天竺の葬法四ツ有一には水葬とて屍を江河に投て魚鼈に飼しむ二に火葬三に土葬四に林葬とてはやしの中に棄置て鳥獸に飼しむといふこと釋氏要覽にあり

筐も仇の爪琴に

「かたみこそ今はあたなれこれなくはわするゝときもあらましものをといふ古今集の歌にてかきたり爪にてひく物
ゆゑ爪琴といふなり

弘誓の船あなたの岸より彼岸に

弘誓はひろきちかひとよみて佛の衆生をすくはんとしたまふちかひをいふ也またほとけを船師大船師とも云て苦海
を船にてわたし給ふ船頭にもたとへたる事法華經にも見えたり彼岸は心經に到彼岸といふ事あり佛道をうる事を彼
岸に到ると説り

玉の緒

命といふ物は魂をわが體につなぎておく緒のやうなるものゆゑ玉の緒といふ也

親か赦して塵未來

塵の字あて字也盡未來と書べし地藏本願經盡未來際とかけり未來永々までと云心也

焰魔の塵を名乗て通れ

塵は役所の事にてゑんま王宮の前に役所有て鐘を以て亡者の罪を正すこと十王經に見えたり

なむ成佛得脱と

佛になりて此世にくるしみを脱るゝ事を得べしと云こと也

早日もくれて人顔も見へず庵の霧隠れ

この霧隠れといふ文句春のけしきに不相應なりとて難ずる人有ど其はかへつてあたらぬ論也三體詩劉禹錫の詩に日
出三竿春霧消ともつくりて霞がくれといふも同じ心也

○假名手本忠臣藏 山科齋

風雅でもなくしやれてなく

風雅はものずきといふ様なる心しやれば洒落とかきて性理大全に周茂叔は人品はなほ高くして胸中の洒落なること光風霽月のごとしといへるやうにうき世をはなれて氣性の高き心を云也

牽頭仲居に送られて

箕山が色道大鑑卷の一に云太鼓持といふは傾城買の家が付したがふものをいふ此名目のおこりは紀州の雜賀跳にはじまる鐘をもちたるものは首にかけてをどる其中に鐘をもたぬものに太鼓をもたするなり是によつて此名目とすといへり又同書に太鼓持の異名をむかしは行證人、あかば、おひやなど云又跡付、杵持、惟光、ぶんせき、末社などともいひたるよししるせり惟光は光源氏の君の心しりの若ものにて源氏の君のしのびありきのをして常につきしたがひ牽りし事源氏ものかたりに見えたり其心にて名付たる物成べしされど昔も太鼓持を惟光といふことは筑紫がたにいひ馴て上方すぢにはこれを用ひざりしといへりぶんせきは慶安のころ大坂邊にていひならはせし名目にて本客とは席をわかつといふころにて分席といふよしかの書にみえたりこの色道大鑑は甚珍書にて寫本十八卷あり此作者は顯傳明名録をあらはしたる吞舟軒箕山と云人なりまた太鼓持のことを漢土にては牽頭幫間六頭子など共いへり

雪こかし雪はこけいで雪こかさ

雪こかしは雪團と書て源氏物語の卷にわらはべおろして雪まらばしせさせ給ふちひさきはわらはげてよろこびはしるにあふぎなどもおとしてうちとけがほおかしげなりと有わらはげはをさなきさまを云也

且那申且那

本字は檀那なり今下人より主人をさして檀那といへどもとは佛語にて僧より在家をさして云こと葉也それゆゑ俗にわが頼み寺をもだんな寺といふ也くはしき事は法界次第に出て内に信心あり外に福田あり財物有三事合して心に捨法を生じよく慳貪を破る是を檀那とすと云り

朝夕に見ればこそあれ住吉の岸のむかひの淡路嶋山

此歌は津守國冬の歌にて新後拾遺集の雜の上に出て下句うらよりをちの淡路嶋山と有これは拾遺集に出たる人丸の「すみよしの岸にむかへる淡路嶋あはれと君をいはぬ日そなきといふ歌の詞をひとつにおぼえあやまりてきしのむかひのあはち嶋山といひ傳へたる也さて此歌のころは朝夕にみてみればこそめづらしうも覺えね此すみよしの浦よりはるかに見わたすあはぢしまのけしきは何ともかともいはれたるけしきにてはなき物をと淡路嶋のけしきはいつみても見あかぬといふ心なれば今由良の助の引ていふ歌にては心うらおもてにてあたらす是は作者のあやまり也詞もしどろ足取もしどろに見ゆる

東坡集に取次と書てしどろにと點せり下學集にも取次筋斗と書てしどろもどろとよませたり取次はものゝ次第なく入ませりたる事筋斗は俗にいふとんぼうかへりの事也源氏物語むめかえの巻に筆にまかせてみだれ書たまへるさま見どころ限りなししどろもどろにあいきやうつきみまほしければと有て河海抄には此處の註に「よしとてもよきなはたゝすかるかやのいさみたれなんしとろもどろにと云うたを引たり

降たる雪かな

この所の二くさり三くさりの文句は鉢木の謠をわざといひかへて雪は鵝毛に似て飛て散亂し人は鶴筆を被て立て徘徊すといふ詩をかやうにとりなしたるもの也此詩は白氏文集に出て鵝毛とは鵝といふ白き鳥の毛のこと散亂はちり

みだれたる事也鶴筆は鶴の毛にて織たる毛おりの衣の事徘徊は立もとをとるとよみて立どまること也
伊勢海老と盃穴の稻荷の玉垣は

赤き物をいひならべたる也玉垣は朱の玉垣と歌にもよみて神社のめぐりのあかくぬりたる垣也玉は垣をほめたる詞
なり

嶺の雪吹に岩をも碎く大石同前

ふどきはつもりたる雪の風にくだけおつるをいふ也後京極攝政の月清集に「旅人のみのしろ衣うちはらひふどきを
わたる雲のかけはしともよめり

螢を集め雪を積も學者の心長き例

螢をあつめし故事は晋書に車胤といふ人博く書物を覽て退窟することなかりしかど家貧しうしてつねに油を得ざり
ければ夏のころはきぬの袋にあまたのほたるを入れて書物をてらし夜を日につぎて是をよみたるよし見えたり又雪を
つむ故事は孫子世録に孫康といふ人貧にして油なかりければ多は雪に映て書をよみたるよしみえたり

刀脇指さすがげに

秋草に云近世刀といふて脇差と一具にさし添るものをいにしへは打刀鐔刀とも云し也古き武家の禮書に刀をたまは
りたらば指て禮すべしといひたるは腰刀のこと也打刀を座敷人前にてさすは無禮也といふまた云脇指の事本名は脇
差の刀といふもの也此ものむかしより有しものなれども今の世のごとくなる物にはあらずいにしへは脇差は六七寸
許りにして柄もまかず鐔もなく鞘尻を圓くして短き下緒を付さげをの先を結玉にしかうがいをして懐中にて脇の
方へよせてさす故わきざしといふ懐中にさすに衣服にかゝりさはらぬ爲鞘尻をまろくするなりふところより外へす
べり出ぬために下緒のむすび玉を帯の通りにおしはさむなりと有

梅見付たるほゝ笑顔まぶかに着たる

ほゝえむとはすこし笑ふを云ほゝは頬の字にてむかしのかなづかひにてほゝと書也まぶかは目深と書て目の字をま
とよむもむかしの詞也帽子をめのあたりより下へふかく着たるを云

小浪御寮

人のむすめを御寮とも御料人ともいふ事にしへはなき事にて太平記に北條高時の男を萬壽御寮と書たれば其ころ
は男子をも御料といひしなるべし今按ずるに寮の字は文選の註に小窓也と有はまどの内にそだてられたるむすめを
御寮といふなるべし長恨歌に楊貴妃の事を養はれて深窓に在て人いまだ識ずとも作り源氏ものがたりの品定の所に
も親のかしづくむすめの事をいふとておひさきこまれるまどのうちなるほどはと書るにても知べし

只今は浪人

浪の字はみだりとも讀てよるかたなくなることを流浪ともいへば浪人は仕官をやめてうきたるからだといふ事也文
苑彙簡に踪迹定り止る所なき人を浪人といふよし見えたり

追従武士の祿を取

追従はおひしたがふとよむ字にて人の氣にすこしもたがはぬやうにつきしたかふ事にて下學集に媚諂之義なりと注
せり源氏物語うつせみの卷にはとのゐ人などもことにみいれついそうせずと書り

二君に仕へぬ由良ノ助が

史記に齊の王蠋が詞に忠臣二君に仕へず貞女二夫を更すと云て燕の國に仕へずして死したる故事あり

心へだての唐紙を

今世間に用ゆる襖はむかしは襖障子といひたる物にてそれをから紙にてはりたるゆゑかのふすませうじの事をから

かみと云也職人歌合から紙のうたに「空いろのうす雲ひけとからかみのしたきらゝなる月のかけ哉とよめり平家物語長門本にからかみの障子をたてたりと有よし秋草にいへり

貞女兩夫にまみへず

上の玉蠅の詞をうけて書たる所おもしろし

涙一途に突詣し

一途はひとみちといふこゝろ也

勿體ない事

「諺草に俗語の勿體はすなはち物體也人物のすべよきを物體のあるといふ君父を蔑にし神明を侮るなどは人物の正體にあらざる故にこれを物體なしといふなりとあり

薦僧の尺八

薦の字は誤にて本字は虚無僧也又普化僧ともかけりもろこし盤山寶積の弟子普化禪師といふ人尺八をふき鈴をふりて明頭來晴頭打四方八面來などいふ事を唱へありかれし事有其流れを汲て文明年中朗庵といふ僧みづから普化道者と稱して宇治の吸江庵京都の妙安寺に住して尺八を好みしゆゑ此寺終にとも僧の本寺となれるよし雍州府志に見えたり薦僧をむかしは暮露とも暮露くともいひたる事は明惠上人の空華論兼好のつれく草等にみえたりまたむまひじりと云し事は職人歌合にみえたり

とたんの拍子

塗炭と書也書經に民塗炭に墜といふ事あり註に夏の桀王闇く亂れて下民を恤まず民の危ふき事泥に陥り火に墜てこれを救ふことなきが如きをいふと有文選の註には塗は泥也炭は火也と有されば俗にあぶなきかげんと云心をとたんと

の拍子とは云也

修行者

すべて佛のみちを修行するものをいふ

白木の小四方

三寶の類にて俗に足打といふもの也

引出物の御所望ならん

掣引出とて嫁入のときむこより舅へおくる物をいふこの字は江家次第にも見えたり

刀は正宗指添は浪の平行安

正宗のこと薄雪清水齧に註す浪平行安は一條院の時の刀鍛冶也

あんかんと

安閑とかいてやすらかにしづかなりといふ心なり

放埒なる身持

諺草に人の法度にしたがはざる事馬などの埒を放れいづるにたとへて放埒とはいふなるべしと有埒とは競馬の時馬を外へ出さぬやうに兩方にゆひたる垣をいふ也按ずるに定家卿の拾遺員外集に「埒のうちにくらぶる駒のかちまけものれるをこの鞭のうちからといふ歌有されば俗に埒もないと云詞もとりしまりのなき事埒のあくといふは垣をあけて馬を自由にかげさすことよりいふなり

大だはけ

諺草には淫氣と書て恥をもしらずおろかにあさましきを云よしに云り

馬鹿つくすなど

秦の趙高亂をおこさんと欲して群臣のしたがはざらん事を思ひ鹿を二世皇帝に獻じて馬也と申せしかば二世皇帝左右の臣下にこれは何をとふ時趙高にへつらへるものはわざと馬也といひへつらはぬものは鹿也といふを聞てひそかに鹿といひし者を殺しておのれがいきほひを見せたる事史記にいてたり是より人をたぶらかす事を馬鹿にするといひ傳へたり

鹽梅見せう

書經に若和羹を作らば爾これ鹽梅ならんといふ事有てむかしは鹽と梅とを以て食物の加減をせしゆゑ天下の政をほどよくとり行なふ臣を鹽梅の臣といふこと山谷詩集に見えたりそれ故に物のほどらひをもあんばいと云

不祥ながら

不祥の字は日本紀にてはさがなしと讀てよからぬ心也

長押にかけたる鎧追取

鴨居の上に打付たる横木をなげしといふ事誰もしりたること也敷居の外にうち付たる横木をもなげしと云こと今はしらぬ人あり源平盛衰記に長押に尻かけ大床に足投出しといふこと有義經記に辨慶長押の上について居て腰のほら貝とりいだしと云事有つれ／＼草になみ／＼にはあらずと見ゆる男女となげしにしりかけて物語するありさまといふ事あり是等は大なる家造りは縁より敷居までの中高くてしきみの外の方になげしを打し也釘かくしも有これをなげしとしらぬ人有と秋草にいへり今爰にいふは鴨居の上のなげしの事也

諸足ぬはん

もろあしは兩足也諸ともとは人と我と二ツ也もろ袖はふたつの袖をいふ皆同じ詞なり

體憤をはらさんと

うつとしく思ふいきどほりをはらすといふことなり

造營の砌

造營はつくりいとなむといふこゝろ也。砌といふ字はもと前栽などの事なれど其折からといふ心に用ひ來れり

若氣の短慮

短慮はみじかきおもんはかりとよむ字にて氣のみじかきこと也

未來永劫

未來はいまだきたらずといふ心にて先のよの事永劫の劫の字は世の字の心にて永き末の世までといふこゝろ也皆佛

書に出たる字也

露しらず

露といふものは草などにおくかと思へば直に消るはかなきもの故それをたとへにしてすこしのあひだの事を露の間

ともいひすこしばかりの事を露ばかりともいふ也こゝにつゆしらずと云はすこしもしらぬといふ心也新古今能宣の

歌に「秋霧のたつたひ衣をきてみよつゆはかりなるかたみなりともとよめり

冥加の程が恐ろしい

冥加の字は佛書にては梵網經に出て目にみえぬ所より佛の恵みのあることを云又神書にては神代口訣に出て天照大

神の託宣に冥を加るにまさるすなほなるを以て本とすといへり然れば目に見えぬ所より加護し給ふ神佛のおぼし召

も懼しきと云心成べし

君子は其罪を惡んで其人を惡まず

此語はこれより先に御所櫻の院本にも出て伯夷叔齊は其罪をにくみて其人をにくまずと書りこれは論語に伯夷叔齊は舊惡を思はずとのたまひし孔子の意を取て其語をつくりかへたる物のよし穂積以貳もかけり四書蒙引に司馬溫公は姦邪の小人の己を害するものをにくむといへどもまた其賢こきを吝嗟すといへる心なるべし未前を察して

いまだ其所へいたらぬ所をおもひはかるを云

石塔の五輪の形

石塔をたつる事は釋氏要覽に碑石を疊んでこれをつくる形小塔のごとしと有五輪は大藏法數に五體といふも同し心にて人間の體の頭とふたつの肘とふたつの膝とを地水火風空にかたどりて五輪といふとありそれを石塔のかたちになつしたるを五輪ともいふ成べし

玉椿の八千代迄ともいはれず

新千載集賀茂經久の歌に「神山のみねにおふてふ玉つばきやちよは君の爲といのらん」とよめり

吳王を諫めて誅せられ辱しめを笑ひし吳子胥が忠義

吳子胥と書は誤にて伍子胥と書べし楚國の人にて身の長一丈肩間一尺有しといふ吳王を諫めて誅せられし事史記にみえたり

唐土の豫讓

晋の豫讓智伯に事へたりしに趙襄子といふ人智伯を亡したる故趙襄子をころして其仇を報ぜんとしけれども其志を遂ざりしかば襄子が衣を撃てみづから劍に伏して死したる事也是も史記に出

孫吳が秘書我爲の六陷三略

吳の孫武帝があらはす兵書を孫子といひ魏の吳起がつくれる兵書を吳子と云六韜三略司馬法尉繚子太宗問對を合せて武經七書といふ也六韜と書もあやまりにて本字は六韜三略なりこの二ツの書は太公望の作なり

舅が情のれんぼ流し

尺八の譜に云虚無僧の手二ツ臨門流虚鈴とありしかれば此れんも流しといふ尺八の手の名を戀慕ながしといひかよはしたるもの也戀慕はこひしたふといふこゝろ也

よべとこたへぬだんまつま

俱舍論に曰命終に臨む時を名つけて斷末摩とす苦受に逼られて物を別つこと有事なきを末摩と云と有

これや尺八ぼんのうの

尺八は壹尺八寸に竹を伐たるものにてむかしは樂器にも用ひたるよし河海抄にみえたり源氏物語末摘花の卷にさくはちの笛とあり釋氏要覽に煩惱に百八の數あるゆゑそれを除かんために珠數の玉をも百八のかずにつらねて佛號を唱ふるよし見えたり爰には尺八を百八と通はして作れり

關の契りは一夜ぎり

一節截といふ笛を尺八の事とすれども是は洞簫といふ笛の類にて尺八とは別なりといへりこゝも一夜を竹の一節にかよはしたり

○壽 門 松 新町齋

筑波根のみねよりおつる瀧のしら玉ひいふうみいよ

「つくはねの峰よりおつるみなのか戀をつもりて淵となりけるといふ後撰集にいでたる陽成院の御製と」龜の尾の

山の岩ねをとめて落る瀧のしら玉千代の數かもとよめる古今集の紀のこれをかの歌とをとり合せて枕にかけり本歌の筑波根はつくば山のみねのことなるを女兒のたはふれにはごいたにてつくはねのことにとりあはせたり此はねといふものは胡鬼の子とも羽子ともいふものにてそれをつき上る板をはごいたとも胡鬼板ともいふ也

ひよくの羽子板むくろじも

比翼の鳥の羽とうけたりむくろじは本字は木樂子と書俗につぶと云もの也樂實ともいふよし本草綱目にみゆ

戀の二葉の禿松枝と枝とをやり羽子も

禿といふ字は韻會に髮織く長からずして禾稼の如しとあれば俗にいふしよほく髮のこと也それゆゑ太夫につきしがふ少女をかぶろと云ひならはしたる物なり蛻巖文集には雛妓といふ字をかぶろのことに用ひたりやり羽子の事は箕山大鑑にいほくはねつき正月の手ずさび也是天職ともにくるしからずはつ春の夕つかた小づまかいどりてはわ胡鬼板右の手のみにてさばきたるいとやさしげありたちむかひてはねをやりあひたるより外なしそも又程の久しきもさのみ見よからずやがてさしおくべき也數をかぞへてひとりのみつくことゆめく有べからずといへり是は寛文より延寶のころ迄の曲中のさまを書たる所にいへり

千代も根引はたへすまじ

正月の初めの子の日に松を引てうゑかゆるを子日すると歌にもよめり玉葉集小辨の歌にも「數しらず引る子日の小松かな一もとたにも千代はこもるをとよめり新町の太夫を松にたとへたれば身うけする事を根引にするといひならはしたり

かすみの袂虹の帯雲のうはぎをゆりかけて

これは太夫のよそほひをいふ也霞のたもとと後撰集通方の歌「さほ姫の花色衣はるをへてかすみの袖に匂ふやま

かせと讀たり虹の帯は詩學大成の虹の詩に一條の綉帶天腰を束ぬと作れり又雲のうはぎは人丸の集に「あまの川霧
たちわたるたなはたの雲のころもかへる袖かもとよめり

新艘つき出し出立はへ

むかしの遊女はおほく船にのりて客をむかへたる物ゆゑつきだしの遊女をあたらしき船にたとへて新艘と書たるな
るべしされど新造はよめのことをもいへばそれより遊女の稱にうつりたるにても有べし秋草に云人の妻を御新造と
いふ事むかしよりありし事也蛭川殿中日記にて見えたりよき人は妻をむかへるにはかならず妻の住居すべき家であ
らたに造作するゆゑ御新造ともいふ也ある説に船をあらたに作りたるを新艘といふて祝ふこれになぞらふるといふ
は非なりといへり出立ばへは衣裳を着かざりて外へ出たるがはへありて一きはうるはしく見ゆるといふ事也源氏物
語にはいではへとかけり

うさをも芥子のべに鹿子ごくざいしきの越後町

冬としのうさをも消すといふ事を芥子にいひかけたり芥子は至つてちひさきもの故佛書にも須彌を芥子に納るとい
ふたとへありてこまかなる鹿子をけしかのこともいふ也かのこの事はいせものがたりに時しらぬ山はふしのねいつ
とてかかのこまたらに雪のふるらんといふ歌有て鹿の子まだらとは鹿の子の背にむら／＼白き毛のあるに富士の雪
の斑なるをたとへていふよし古意に見えたりそれよりく／＼染にする事をゆひ鹿子とはいふ也極彩色の繪といふこ
とを越後町に云ひかけたり

三筋にみつの春立ば

くるわの三筋町にみつの春の立といひて三の字をかさねたるなり正月を三の春といふは年の始時のはしめ日の始な
りと玉蠲寶典に云へり

やりが前だれあかねさす天も酔たり人も酔ふ

箕山大鑑に云香車はひとすぢにむかふへゆくゆゑに異名を鑑といへりこれになぞらへてやり手を香車といひ来れり
 されども此名目ことふりたれば今は遣女と云べしあかねさすは赤き光りのさすといふ事也新古今集菅家の御歌に
 「あまの原あかねさし出る光にはいつれの沼かさえのこるへきとよませ給へり天も酔たりとは和漢朗詠集の文に春
 の暮月々の三朝天花に酔りと作れり是は桃の花をいふなり

春しりそめて七つ屋の藏の戸出る鶯茶の

玉葉集定頼の歌に「としふれとかはらぬものはうくひすの春知りそむる聲にそありけるといふ歌と谷の戸出る鶯と
 よみたる歌とをとりあはせて世話事におとしたる所例の平安子が妙作也

おろせの風とも見へぬ

箕山大鑑器財門におろせはもと駕籠のりものゝ事也また乗物をかく疋夫をさしておろせともいふとかかけり

五器さげるずいさうと

下學集には御器と書てもとは貴人の供御の飯器のことなるを下さまの飯碗の事にいひならはしたり古き名物の茶碗
 に尼御器といふも有書言字考には御器又定器碗也それをさげありくは乞食のさまを云瑞相はもとめてたきありさま
 をいへど俗語にてはかやうの所にも云ならはしたり

てゞごさまはかくれもないいしんじよ也

いしんじよは石丈とかいて石のごとくかたき人といふこと也丈は丈夫といふ事にて男の通稱也

うば玉のくろはぶたへ

うば玉はくろきといふまくら詞也

千兩にするは三つ羽の征矢

みつばの征矢とは金まうけることが矢のごとくはやきといふことなり

かづくふとんのどんすよりむりやうの事ぞ思はるゝ

緞子どんすじりやう五絲ごすみな唐織の名也爰は五絲を無量といひかけたるなり

金つかふて髪きらせた

箕山大鑑に云傾城の髪きること心中の其ひとつにして近代はなはだもつて盛なり其はじまる所播州室の遊女宮木といひし女より起れり醍醐の中納言顯基卿これを愛し給ひて都に侍りけるがいかなる事か侍りけんすさめられ奉りてむろに歸りぬある時中納言の家人西國より京へのぼるをうかどひ見て髪をおしきりてみちのくに紙にひきつゝみその紙に歌を書たり「つきもせすうきを見るめのかなしさにあまとなりても袖そかわかぬ」と書て船になけ入たるよし撰集抄にもせたりこれ遊女の髪切たる濫觴也是は顯基卿の心のうつろひたりしをうらみ奉りて切たる髪也と云云又云傾城の髪切る事此ごろの事と計り思ふべからず二條あたりの人の所持したる屏風に傾城遊翫の圖を書たり是狩野法印永徳が筆也此繪に傾國あまたあつまり酒宴する内にみじかく切たる髪を押しだしたる傾城尺八ふく所をかけり振袖ならば禿にも見まがふべけれどしかもふり袖に非ず禿はかぶるにてかたへにあり是永祿天正のころにもかきたるにや繪本をもつてこれをかゝば猶以て久しかるべしかゝる舊例あれば髪をきる其ころはかはるといふとも古風をまなぶを豈風流なしといはんや

瑠璃天 狗卷之四

○神靈矢口渡 渡守齋

可愛らしいといはふか

可愛の字は日本紀神代卷一書に伊弉諾伊弉册の二神みとのまくばひしたまふとき妍かたに可ま愛ま少男をとこをとのたまひしよりはじまりたる詞にて男女のあふことを字の聲にて可愛といふ也

思ひ亂るゝいとすゝき穂に顯はれて

糸のやうなるすゝきが穂に出れば花すゝきとも尾花ともいふ也いと薄の歌は未木集長方「すかるふすくるすのをのゝいとすゝきますほの色や露や染らんとありまたすゝきの穂に出ることをよみたるは古今集仲平「花すゝき我こそ下に思ひしか穂に出て人にむすばれにけり

保養がてら

保養はたまちやしなふとよむ字にて温公通鑑にも疾いまだ全く平かならざれば保養をもつはらにせんと欲すとあり琥珀の塵や磁石の針粹もぶ粹も

琥珀といふ石は松脂土中に入れて千年にして此石となるよく芥を拾ふと本草綱目にしるせり磁石は字彙に石にして鍼を引べしと有和名はりすひいしと云此二ツの石はちりをもはりをもすひつける物ゆゑお舟が養岑公をつけまはす姿にたとへて吸と云字を粹と云字の音にいひかけたる也

ふ肖と思ふて下さんせ

不肖は文選の註に不才を謂也と有て知惠のなき事成を俗語にてはめいわくながらといふやうの詞につかひ來れり是は風俗通に子を生て父母に似ざるを不肖といふとかきたる義にて似あはしからぬ事なれど云心に用ひたる成べし日影の木々も花さげば岩のはざまの溜り水

影の字はあやまり也陰の字を書べし岩のはざまは岩のあひだなり

さはらて落る玉ざゝのあられもないが戀路也

源氏ものかたり品定の所に女のさまをいふとて折らば落ぬべき萩の露ひろはゞ消なんとみゆる玉ざさのうへのあられなどのえんにあへかなるすきずきしさのみこそおかしくおぼさるらめと書たる詞をよくとりなしたり

義岑公も稻舟の否にもあらず

古今集大歌所の歌「もかみ川のほれはくたるいな舟のいなにもあらず此月はかりとよめるをとりたり否にもあらずはいやにてもなしと云心也

じつとしめたる手の内は

神代卷一書に陰神すなはち陽神の手を握りてみとのまくばひすといふこと有佛書にては俱舍論に夜摩天は纒に抱て嬌をなし都史多天は但手を執によると有

戀の鏡前情の要

情の要は扇のかなめにたとへたる也桃華蕊葉扇の所にかなめは蝶鳥をかねにてうちて是を用ゆと有

互にいだき月草のうつろひやすき色糸の

月草は露草のこと也むかしは白き衣に露草の花をすりつけてもやうとしたるに藍色なる故色がうつりやすき也古今集よみ人しらすの歌に「月草に衣はすらん朝露にぬれての後はうつろひぬともと讀りまた同し集に「よの中の人

こゝろは花染のうつろひやすき色にこそ有けるとも有こゝの文句は此二首の歌にて作れる也
ぬれの糸口綻び口吸付引付

ほころぶは俗にふくろびると云詞也遊仙窟に腰支一たび過て勤ぬれば心の内百の處傷む但若日子ことを得ばあまたの事は承り望まずといふ詩あり貫之の土佐日記にもたゞおしあゆのくちをのみぞすふこのすふ人々の口をおしあゆもし思ふやうあらんやとたはふれてかけり

普請の結構

普請はあまねくこふといふ字にてもと出家よりいひ出したる詞也百丈清規普請の法に力を均しくする也と有てあまねく人の多力をこひえて堂寺などを建ること也今俗家に家を造作する事を普請といふはあたらぬ事にてかの出家の建立のことよりとりちがへたること葉也結構は文選靈光殿の賦に其結構をみるに規矩天に應ずと有て李善の註に結構は交る也構は架する也と有さまゝの材木をとりまぜてくみ上ることをいふ俗に花美なることを結構といふは少しあたらぬこと葉なり

跡にしよんぼりほいなげに

しよんぼりはそぼりといふことにてこまかなる雨をそぼふる雨といふに同じ伊勢物語に雨そぼふりてと有雨にぬることをもそぼつといへばしよんぼりは身すぼらしきすがたをいふ也

手著もしらぬ海中に

たつきもしらぬとは俗にとりつきどころのなきといふ心なり海中はうみの中をいふ也海をわだづみともわだともいふ心は海は舟にて渡るものゆゑわたるといふ字の心にていへりこゝは古今集よみ人しらすの歌に「をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよぶこ鳥かなとよめるをとりかへて用ひたる也

得なきお舟が物思ひ

新古今好忠の歌に「ゆらの戸をわたる船人かちをたえゆくへもしらぬ戀の道かなとよめる歌の心をとりたり

相圖の狼烟を上ふか

のろしを狼烟とかく事は韻會に烽火に狼の糞を用ゆれば烟たどちに上りてあつまりてちらず風ふきても横になびく

事なしといへり

惡寒發熱

惡寒はぞつとする事發熱は上氣することに譬へていふこの語はもと風邪にてさむけたち熱の出ることにて傷寒論に

あまたいでたり

いふて水棹や詞の楫

水棹は舟のさほ也お舟といふ名によりていふてみるといふ事を水棹といひかけ詞にてあしらふことを詞の楫とつゞ

けて舟の縁語をよく續けたり

渡に舟と六藏は

法華經本事品に其願ひを充滿せしむること渡りに船を得たるがごとく病に醫をえたるがごとしとあり

かくて時刻もひさ象の

時刻の久しくなるといふことを久かたといひかけたり久方といふことは空といふ字の枕詞にて天はいつまでもかは

らぬものゆゑ久しき方といふ心なるよし燭明抄にしるせり今こゝにひさ象とかきたるは續日本後紀に匏象ひょうざうの天とい

ふ事有によれり天のかたちのまろきをひさごに見たてたるなれば匏象といふ心也と冠辭考に書たりこゝは此説によ

りて書たるなるべし

廿日ゐなかの月出て

廿日の月は亥の刻に出るなり

燈火消て眞の闇

眞の字はあやまり也深の字をかくべし明惠上人傳記に深の闇にて有にとかけり

びつしやり碎る芬盤

こゝにたばこ盆を芬盤と書たるは清客寄語に芬盤を唐音にて打馬高望と譯し芬吹を起紗里と譯せしによれりたばこは慶長の比阿蘭陀船にもち來りしより日本に弘まれり其はじめは阿蘭陀の崑崙兒が紙をひねりて筆のごとくにしたばこの葉をもみてかの紙のはしにつゝみてのみ居たるを見てこの國の貴賤となくこれをのみ覚えしよりやがて眞鍮銅などを以てきせるといふ物を製してあまねくのむ事になれるよし羅山文集に見えたりまた元和元年六月烟草を吸ことを禁じ給ひしよし和事始にみえたり按ずるにこのたばこいふものは本草綱目には是をのせず漢土にてもあたらしき物にて芝峰類説には倭國より出るとし又一説に南蠻國に女人あり其女の名を淡婆姑といひしがこの女疾の疾を患ふること數年なりしにこの草を服して其疾の癒たるよりやがて此草を淡婆姑と名づけしとかけりこれによればたばこいふ名は和訓にてもなく變語にてもなくもとは女の名也しとしらるゝなり

上にはわつと玉ぎる聲

玉きるは玉きはるの略語にて魂きはまる聲といふこと也死ぬる期のこゑをいふなるべし萬葉集に「我せこかその名いはしと玉きはる命はすてつわすれたまふなといふ歌も有て後々には玉きはるといふことを命といふ字の枕ことばとせり萬葉には魂極と書て玉きはると讀せたり

佛とも法共辨へず

報恩經に佛と法とのわかちを説て云佛は法を以て師とし佛は法に従つて生ず法はこれ佛の母佛は法に依て住すと、
けり

悶絶せしも

悶はもだゆると云字絶はたゆるといふ字にてもだえくるしみて息のたゆること也

大膽千萬な

大膽はきものふときといふ事にて千金方に遜思邈が心は小ならん事を欲し膽は大ならんことを欲すといひしよりい

ひ傳へたる俗語也

打 擲

うちなげうつとよむ字にて物をうちつける事也

常々不埒な

埒の字は馬をはなざぬ爲に垣をゆはすと云こゝろにて我儘に成ことを云也

異見いふても歎いても

異見の字は續日本紀には意見と書りもろこしにも意見といふ書の名有て意はこゝろばせといふ字見は見識の見の字

にてわが心におもふ存じよりをいふて人をいさめる義なり

一念發起もしたまひて

一念はふと心におもふこと發起はおこりおこるとよむ字にてふと佛法に歸依するの心おこる事をいふ發起の字は俱

舎論にもみえたり

覺悟極めて

覺悟はおぼえさるとよむ字にて物を合點すること也
血汐に争ふ血の涙

血汐は血が汐のやうにわき出るをいふ血の涙は韓非子に下和といふ人璞を楚山の中に得て厲王に獻せしかば玉人に見せたまふに石也といひしゆゑ下和か足を削せたまへりそれより後武王文王と三代の間其まことの玉なる事をするものなかりし故下和かの珠をいだいて楚山のふもとに泣ゐたるか三日三夜にして涙盡てこれにつぐに血を以てすもありこれはあまりになければ後には涙も盡て血の涙を流すといふこと也古今集哀傷の部業性法師の歌にも「ちのなみだ落てそたきつしら川は君か代までの名にこそ有けれと讀めり

ふ便びんといふも愚なり

不便の字は荒政要覽に老弱道路に堪がたき一つの不便也と有源氏ものがたりにもふびんなるわざ哉と有てたよりなくふかつてなることをいふ也それがかやうにかなしみあはれむ心に轉じたる也

釋迦如來が元服して

釋迦といふは天竺の五姓の一つにして氏也と釋氏要覽に有牟尼といふは名也智度論に釋迦牟尼といふ事を秦の世には能仁寂嘿といふと有て註に姓名兼稱する也といへり如來と云ことは成實論に如實の道に乘じ來て正覺を成也と有てまことの道によつて正しきさとりをなす人を如來といふ也元服のことは峴江入楚に禮記を引て天子の子は十二にて冠すと有てはじめて童形をあらためて冠下にかみをゆひ冠をきすることをいふ也元ははじめといふ義服は冠をきること也地下の俗にさかやきをはじめてそのことを元服といふは字義にあはざれども今の世には一統にいひならししたることば也

人を集る法螺吹立

螺は口にてふく貝のこと也佛家に用ゆる故法の字をつけてほら貝といふ也
村々の圍をとくと

圍むとは軍兵を以て其所をとりまくこと也左傳公羊傳などにも宋を圍む鄭を圍むなどいふ事あまた有かこみをとくとはとりまきたる軍勢を引とることなり

漸抱を振上げて

たいこのぶちを抱といひ琵琶のばちを撥といふ也ぶちと云はばちといふ聲のはひふへほにてかよふ也

領巾摩山の悲しみも

松浦さよ姫が夫をしたひし故事也比禮振山は肥前の名所なり萬葉集の歌に「遠つ人まつらさよ姫つまこひにひれふしよりおへる山の名とよめり

匹夫め待と呼かけられ

論語に匹夫も志を奪ふべからずと有て集解に匹夫微也といへども其志を奪ふべからずといへりこゝにて匹夫めといふはいやしめていふ詞なり

飛て火に入夏の虫

符子に其味きを安んぜずして其明かなるを樂しむはこれ猶文蛾の暗きを去て燈に赴て死するがごとしといふ故事によつていひ傳へたるたとへにて火とりむしがおのれと火に入て死するにたとへたる也

力一ぱい牛頭馬頭が

十王經に路を引牛頭は肩に棒を挟み行を催す馬頭は腰に叉を撃ぐと有て牛の頭馬の頭の獄卒が亡者をさいなむさまなり

觀念と

觀はとくしんする事念は口へ出して物をいはずして心にこたへてゐる事也

お怪我はなかつたか

惟瑕と書が本字也諺草に云俗におもひよらずして疵を被る事を惟瑕といふあり惟はあやしむとよみ瑕はきずとよむ字なり

水破兵破の二つの御矢

盛衰記に水破兵破のこと有て頼政の水破といふ矢は黒鷲の羽にてはきたる矢也といへり

魂魄はれいくと

魂といふたましひは死すれば空にさがり魄といふたましひはめいどにゆく也三體詩に魂は冥漠に歸し魄は泉に歸すと作れり冥漠はそらの事泉は黄泉とて地の下のことなり

官軍をかり集め朝敵を亡して

官軍は天子の御軍勢をいふ朝敵は天子へ敵たふものをいふ也

松明挑灯きらめきて

松明は和名抄に續松とかけり勢語古意に云松の秀を物にてまとひつぎてたくゆるむにつき松といふを音便にてついまつと唱ふるなりたいまつとはたきまつといふ訓にて火をたく松といふこと也伊勢物語についまつの墨して歌の下句をかきたるとはたいまつのもえさしにて書たる也擬挑灯の事は秋草に云ちやうちんといふこと古代にはなきもの也いにしへは夜行に松明を用ひし也またあんどうを用る事も有し也夜行に持せし物なるゆえ行燈とは書なり鎌倉年中行事に松明行燈の事有其ころまではてうちんはなかりし也蜷川記に挑灯は籠灯か本也と云こと有これは永祿天正の

比なるべし其比はすでに今の世のてうちんも有しとみゆ籠灯といふものは行燈のさやのごとく丸きかごをさやにして上に横木を取て提るやうにしたる物なり今も奥州出羽などの民家には用ゆる也是を本にしてたゞみてうちんを仕出したる也と有

待どもく沙汰せぬは

杜詩全集に江河の濁れるを沙汰すといふ詩有註に沙汰は篩に沙を貯へ其細かなるを去て其大なるを存するを沙汰といふと有是をみればいさごをゆりわけることにたとへたる字也俗に案内するやうの事をさたすといひうちすておく事を沙汰なしなどいふはこれより轉じ來りたる詞にてものをしかとことばる事を沙汰するといふ成べし

空に雷電霹靂

雷はかみなり電はいなびかり也はたゞがみは鳴はためく雷と云事也

水主棹取

水主はかこ也棹取はかちとり也

比興なり者ども

比興の字は詩の六義の内にて比はものをたとへること興はものを見たてることにて二字ともものにをよそへる心ゆゑしかとせぬ事を比興といふ成べし

虚空をにらんで

虚も空もむなしといふ字にてあてどのなきこと也

廣言吐し

廣はひろしといふ字にておほきなることをいひ出す也

膽礬色

膽礬といふ石は色の青き石なる故顔色のまつさをになることをたんば色と云也

猶も吹來る暴風

はやてともいふにはかにふきくる大風也

底の藻屑と

藻の波にくだけてちりふくに成たるを云

中にも強氣の

強はつよしと云字にて氣のつよきこと也

甲冑を帶したる

周禮の註に甲は今の鎧なりと有韻會に冑は兜鍪也とあり俗に冑をよろひとし甲をかぶとよするはあやまり也又秋草に云古代は鐵砲なくしてたゞ矢軍のみなりし故甲冑の製も矢ばかりをふせぐやうにこしらへ煉革をもつて割小札につくりし也たまたま薄金にて製したること珍らしきに源氏重代の鎧を薄金と名付て稱美したる也天文十二年に鐵砲わたりし後は鐵砲の勢矢よりは烈しきによつて甲冑の制かはりて札を鐵にて作りあるひは胴を鐵のべにして鐵砲を防ぐ事をおもとしたりと有甲冑を帶したるとはよろひかぶとを著たるを云也

○ 姫 山 姥 第二齣

松浦がたひれふる山の石よりも

まつらさよひめの望夫石となりたることまへに註す

女護の島にことならず

女護島のこと書言字考に古老傳へて日本東海の中に在といひまた羅刹國といふ所を女護島といひ傳えたるよししるせれどいつれもより所なき説也按ずるに後漢書の東夷傳に海中に女國ありて男なしその國に神井ありこれを闔きて子を生むといへりまた金樓子には女國に池ありこの水を浴ればらむとあり又文獻通考に女國は扶桑の東千里にありて鹹草を食ふ葉邪蒿に似てにほひ香はしく味はひ鹹しと有この鹹草といふものは八丈草ともあしたぐさともいひて八丈の島に生ずる物なりそれゆゑ今の八丈の島をむかしの女護の島也といふ説も有不求人全編には女人國とかきたり

いさめられてもいさまぬ顔

上のいさめられてもは諫むるといふ字にて異見すること也下のいさまぬといふ詞はしめりかへりて勇みすまぬころ也

袖は涙のかはごりを

涙の川といふことを皮骨柳といひかけたる也これは皮籠と骨柳とがひとつになりたる名也皮籠は皮にてはりたる竹の籠のことこりは柳の枝をくみあはせてこしらへたる物ゆゑ骨柳とかくなり

三味線もとゝのへ置

三味線とかくはあやまり也三線とか三絃とか書べし此もの漢土にては楊外庵集に出て今の三絃は元の時にはじまるといへり春臺獨語には玩威のかたちの變じたる也といへり玩といふものは拾芥抄にもいでゝいにしへ日本にも有たる物と見えたり三才圖會に晋の玩威が彈ぜし琴の類なるものにて琵琶に似て圓なるものなりといへり近代の三絃の事は箕山大鑑第一瓶器の部に云三絃のおこりは永祿年中に琉球國よりこれをわたす其ときは蛇皮にてはりて三絃な

る物也泉州堺の琵琶法師中小路といひける盲人にとらせたりけるをこの盲人よろこびてしらべこゝろみけれどひき様をきかざれば音律かなはずこれをこゝろうくおもひて長谷の觀音へまうで一七日參籠して彈やうの事をいのりしにあらたなる靈夢ありて階を下るときに大中小の糸三すじ盲人が足にかゝるこれをとりに三筋の糸をかけてひくに無盡の色音いてたりそれより三すぢのいとにきはむる故に三味線となづけたり其みぎりはむざとひきてなぐさみとせしにしばらくして虎澤と云し盲人これを彈かためて後世につたへし也と云り

こきう

書言字考に胡弓と書たり箕山大鑑にむかしの小弓は弓の絃をいたくはりてひきもちひたり八橋檢校みづから考がへて手づから弓をなめらかに長く削りてこしらへたりつるを引はらずゆた／＼とゆるやかにのべて無名指にてひくやうにかけたり其色音昔にかはりて各別也きと有

あはれむかしはぜんせいの松の位も冬がれし

新古今管家の御歌「道のへの朽木のやなき春くれはあはれむかしとしのはれそするといふをとれりぜんせいはまつたくさかり也と云こゝろなり唐詩選に言を寄す全盛の紅顔子憐むべし半死の白頭翁とつくれり松の位のこととは秦の始皇松を大夫に封じたる故事あまねく人のしりたる事なれば註せずしかるに今の入松の位といへば大夫職のこと、のみおもふがおかしければちなみに書つく藻蘆草に松の位は三位也と有また重家の集に刑部卿三位したりしにいひかはしといふ事書有て「ちとせまでさかへ行へき君なれば松も位をゆつる也けりといふ歌あり

ついちのかげにやすらへば

伊勢もの語についちのくづれといふこと有今のへいの事也築地と書はあやまりにて築土と書が本字也土をひちと訓ずるゆゑつちひちといふ事にて土をきづきて塀としたるを云也

車よせより立聞ば

大内の御車をよせらるゝ所にて門内の玄關といふやうなる所也と書言字考にいへり

あの小歌は吾身くるわにありし時

箕山大鑑に小歌といふはむかしの白拍子のうたひし今やうといふものを縮めたる物なり中ごろ泉州堺の住人高三氏隆達といひしもの三十一字の和歌にみづからふしをつけてうたひたるこれいよゝ小歌といふ名目になへりすなはち隆達ふしとて今も世に残れりと有くるわは廓の字にて城のそとくるわのこと也難波の新町京の島原などを廓といふは市中の外にいかまへ有所ゆゑくるわと云也漢土にてくるわを曲中と云よし虞初新志にみゆ

作り出せしかへせうが

替唱歌と書て今いふかへうた也

出ほうだいに聲はり上

出傍題とかくべし傍題とは歌をわがまゝによみて題にはづるゝこと也八雲御抄にくはし理にあたらぬことを口より

出るまゝに云事を譬へたる詞也

男ちく生人でなしあか耻かゝせて

人をいやしめて畜生といふことは涅槃經に身丈夫也といへ共おこなひ畜生に同じと有また隋書に煬帝の淫佚なることを父の文帝の詞に畜生也とせめられたること有人でなしは人外非人など云におなじあか耻とは用捨なく耻をかゝすを云也

そなたの物ごしつまはづれ

物ごしといふ詞は源氏ものがたりに所々ありてみすなどをへだてゝ聲ばかりきくことを云て物へだてごしのことと

いふ事也それをあやまりて俗に人のものいひを物ごしと云也つまはづれは手足の爪のさきまでいやしからぬといふこと也

一河のながれも他生の縁

ひとつながれの河の水をくみあふ事も此世ならぬ前世の縁なりといふころ也この詞は平家物語にも見えたり篠崎維章の和學辨には此語を聖徳太子の明眼論にて見出せしよしかけり

うき河竹の傾城

むかしの遊女は江口神崎などにて川船に乗たるもの故かはたけ或はながれの身などいひならはしたり

よなくかはる大臣の

遊女の客を大臣といふ事は古事談に云小野の宮の大臣香爐といふ遊女を愛し給ひけるが其時また大二條の大臣も此香爐を愛したまへりあるとき小野の宮の大臣香爐に問てのたまはくわれと髻とはいづれを愛するやなんぢすてに大臣二人を通はせりとのおたまへり二條の大臣御髻の長かりし故髻とのたまへりし也と云これをみれば後世に遊女の客を大臣といふことより所ありと云へし

とうり天の中二かい

初利天は欲界の六天の中にして須彌山のいたゞきにありといふこと諸天傳に出たり

木やりでもかんどでも

大木をもちほぶとき歌をうたひて力をつくるを木やりといふ准南子に大木を擧るものは邪許とよぶ重きをあぐるに力をすゝむる歌也と有も木やりのこと也

そりやこそけんくわがはじまつた

文選蜀都賦に誼譚鼎の沸かごとしといへりこれはやかましくにもかへることをいふ也日本にて人とあらそひのよし
ることをのみけんくわとあやまれり

神子山伏にうらやさん

神子はめかんなぎとて神につかへいのりなどをするものを云粹みこのことにはあらず山伏はもとへ行脚する出家を
稱することば也野にふし山にふすといふ心にて山伏とよみたるうた有夫木集に「山ふしのすかたけとをきかは衣心
こはくも身にそはぬかなとよめり職人歌合には今の修験者のさまよみたり其歌は「せんたちのさんきさんけは我
やせんいたの目につくむしのした哉うらやさんは陰陽師の算をかきてものをうらなふを云書言字考に占算とかきて
うらやさんと讀ませたり

せつたかたしにげたかたしわらんづがけてくるも有

雪踏とかきてせつたとよむが本音也書言字考に天正年中千の利休はじめてこれをつくり雪の中に路地をふむにたよ
りすといふ説をいだけり三齋筆記には三齋公のは、君雪の茶の湯にはじめて思ひよりて製せさせたまへりしといふ
事見えたりげたはあしだの事に足踏とかいてあしたとよみたるを後に下踏とかきかへたる也かたしは片足の略語
なりわらんづは薬履といふことをのべていふなり

だい所からざしきまで

禁裡の御膳をとゝのへる所を臺盤所といふより轉じて下々の食物をとゝのへる所をも臺所といひ來りし也源氏物語
末摘花のまきに御だいとあるは膳のことなり

水たごたらひにこけかゝり

撥桶の字をたごとよませたれど是は宛字也もと田へ水をくみ入れるうつはものにて田子がになひてゆくものゆゑ其

まゝに此ものをたごと名付たる也たらひは本字は盥の字にて文選の註に水を貯はふるうつはものにして手を淨め洗ふもの也と有たらひはてあらひの略語なり

神武以來のりんきいさかひ

神武天皇は人皇のはじめにて鸕鷀草葺不合尊の第四子にて御母は玉依姬也以來はこのかたとよむ字なり格氣の格の字はしわきこと也わが夫を人のけさうするをしはくねたむこと也いさかひは息逆ひの略語にて人と息せはしくさからふ心也

跡かたもないあかうそ

跡はあしとゞまるといふ詞の略語にてしかと目にかゝる程しるしの有ことを云かたは形の略語なればこゝはあとかたちもなきといふ事也赤うその赤の字はもと心の臟は色あかきもの故まことの心を赤心と云丹誠をぬきんづるといふも丹の字はあかしとよむゆゑこれも誠の心をいだしてと云こと也されば衣裳のつくりひなき事をあかはだかといふがことくうそに相違なきといふことを赤うそといふなり

我身に秋風立ぬれば

秋といふ字をものを飽ことにいひかけたたる也續千載集良信の歌に「人とはて年ふる軒のわすれ草身を秋風に露そこほるゝとよみたるもわが身を飽たる事にいひかけたる也

男のざんげ

慚愧と書て二字ながらはぢといふ字也阿含經に慚と愧とを二つの法とたてこのふたつの法なければ父母妻子尊長もわかつたず人間ながら畜類とひとしとときたり

定か誠か

定はものゝさだまること成故しかとしたることを定といひしかとせぬことを不定といふなり
 弓矢神

八幡宮を申也謠曲に弓八幡といふも弓と矢と幡と三つの軍器をならべ八幡宮の御神徳をのべたるころにて此謠を
 ゆみややはたとなづけたるよし惠雨が謠曲拾葉抄にもしるせり

頼光様をざんそうし勅勘の身と成給ふ

讒言をかまへて奏聞せし故勅説にて勘當の身となりたまふといふこと也讒言をさかしらごとゝよむなり奏聞とは天
 子へ申あぐることも也勅説は天子のおほせつけらるゝ御こと葉なり

エ、おとましい

あいうゑをと五音通ずるゆゑうとましいといふことをとましい共いふ也

名字のはちをすゝがんと

秋草に云假名といふを今の世に苗氏といふ假名と書はあやまり也家名と書べし今昔物語第八に上總守平惟時朝臣と
 いふは貞盛か孫にてかくれなき兵なり其郎等に家名はしらず字は大記といふもの有といふ事有天下の武士源氏も平
 氏もいくらも有てたゞ源の某とのみ名のりてはまぎらはしくて家筋わかれざるゆゑおのゝ其出る所の地の
 名あるひは領所の地の名を氏の上にそへてなりのりてその家すぢをわくる也されば是を家名とはいふ也先祖は其家の
 苗なる故に苗氏ともいふと有さればこゝも名氏と書は誤にて苗氏と書べき所也

うんでいばんりと耻しむる

雲泥萬里眼今窮といふ橘正通が詩あり雲は天にあるもの泥は地にあるもの故に上下のちがひを雲泥萬里といふ也白
 樂天の詩にも會面雲泥をへだつとつくれり

一騎當千の兵

涅槃經に人王大力士あり其ちから千にあたる故にこの人を一人當千と稱すとありこれより出たる詞也騎は馬にのりたる武者を云なり

鎧通しおつ取

よろひのうへにさす小刀をいふ也武備志に解手刀と書てよろひどほしと譯せり

伍子胥が吳王を諫めたる

伍子胥の事まへに註す

項羽紀信が勇氣にも

楚の項羽漢の紀信のこと史記漢書等にいふみな人のしりたる事なれば註せず

神變きたい勇力の

神變は諺草に云佛書にもとづきていへる詞也内に天心ありて外に變動の相あるを神變といふと有あんするに涅槃經には一念の中種々の神通變化をなすとあり仁王經には神神變通自成をなすと説りきたいは希代と書てよにまれ成勇力と云心也

今一度人がいに生れ出

人界と書て此人間世界といふこゝろ也

飛行通力有べきぞ

飛行は空中をとびありくこと通力は神通力といひてわが身の自由自在になる事也

無二無三にむらがつて

二も三もなきといふ心也法華經に無二亦無三と有新後拾遺集尊圓親王の御歌に「春はたゞ花とおもふふたつなく
みつなきものは心なりけり共よませ給へり

人畜類の右大將

人間ながら畜生同前のものといふことば也

正盛が家の子大田の太郎

花鳥餘情に家禮とは子の父をうやまふこと也他人なれども子に准じて禮をいたすをば今の世にも家禮といひ來れり
としるされたりされば家禮を家の子と云も此心なるべし

おもふ敵をうつせみのからだは

空蟬とは蟬のこと也せみは時有てもぬけのからとなるものにてかたちはありながら内のむなしき物ゆゑうつほなる
せみといふ心にてうつせみといふ也其ぬけがらをうつせみのからといふ故それを又からだといひかけたるもの也古
今集のうたに「うつせみのからは木ことにとむれと魂のゆくへを見ぬそかなしきともよめり
たちまちやしやの鬼がはら

夜叉とも藥叉ともかく也義楚六帖に藥叉は天竺の語にてもろこしの詞には暴惡とも勇健ともいふ心也神鬼の類なれ
ども福德殊勝にして諸天を衛り護るもの也といへり

○近江源氏先陣館 船長齋

比良の暮雪と賞せしも

近江八景の内の一つにて比良山の暮方の雪のけしきを賞美したる詩歌あまた有

世をこぎ渡る船長の

渡世することを船をこぎ渡ることにいひかけたり船長は船頭也

双紙に六道の切書て

草紙とかくが本字也草は草稿としてしたがきをいふ也

入相の鐘にちりしく花ならて

「山寺の春の夕くれをきてみれば入相のかねに花を散けると云能因法師の歌をとりなしたり此歌は新古今に入たり
くつさめ又人を譏らんすかいのと

かげごといはれてはなひるといふたとへ有はなひるはくさめする事也野客叢書に今の人噴嚏てやまざるものはかな
らず祝して人ありてわれを説といふと有しかれば漢土にも云ならはしたることわざ成べし

兵法の御鍛練が

鍛は鐵匠が刀をきたひてうつこと練はものをねりにねりて念を入るゝ事也後漢書の註に鍛練は成熟なりとありても
のゝとくともゝのひたることをいふ

御手練の程を

これもよくねりとゝのひたる手ぎはといふことなり

竹刀しなへの用意もなし

竹刀は竹を刀のなりにこしらへたるもの也しなへは韜の字を書て韜革韜竹などゝもいふ竹をひしぎて革の袋に入れ
刀のかはりにして劍術のけいこに用ゆうちあふときしはるやうに製したるものゆゑ名をしなひといふなりそれをあ

やまりてまたしなへと唱へならはしたり

納戸へ入や

をさむる戸と書て雜物を入おく一間を云禁中に納殿とて諸國より貢するものを入おかせ給ふ殿ありそれにかたどりて名付たる物なるべし

亂杭にくゝり付

川ばたのみづよけにうちたる杭をいふ長短をそろへずみだりにうちたるゆゑらんくめといふ也

としやおそしと

としは疾といふ字にてはやきこと也はやくゆかんおそくはなきかといそくことをいふなり

風がないだら石山へ

風の和らぐ事をなくといふ也歌に朝なき夕なきなどよむみな和の字也すべてやはらか成ことを和やかといふも同しこゝろ也

佐々木が謀の醜しやと舌を巻て物語

漢書の楊雄が傳に禮官博士其舌をまいて談らずといふ事ありおそれものをいひ果さぬことを舌をまくといふ也薄の穂にもおちるとやら

諺草にいはいはく落武者になりては臆病ごゝろまして草木までも人と見なして恐るゝといふこと也普の謝玄といふ人軍立して賊の大勢をうちやぶりてこれを追ふ賊の兵のがれさり程へだゝりて後八公山の草木のうごくを見て謝玄が軍兵おひきたるとおそれしことありまた日本にても平家の軍勢ども水鳥の羽音におどろきて敗北せしなどみな諺のころのごとし

跡に女房がくしくと

屈の字を源氏物語にくんじてとよませて心の屈することに書り俗語のくし／＼も思ひ屈する心なるべし

一七日の追夜

釋氏要隨に入亡して七日に至るごにかならず齋をいとなみて追薦す是を累七日といふと有中陰經に中有は壽を七日に極むと有て七日／＼に中有の身がいろ／＼にうつりかはりて七七日にしてそれ／＼の生をうくるゆゑことに大切にして弔ふべきよりいへり追夜は書言字考に宿忌ともいふと有て七日にあたる宵より追薦をいとなむことをいふ也

御あかしの火は有ながら

古今著聞集に仁王經をおこなひけるが御あかしの火障子にもえつきて其夜やけにけりといふこと出たりしかれば昔より佛前のももし火を御あかしといふと見えたり

佛果の爲と手をあはせ

果は因果の果の字にて餓鬼の果畜物の果などはあしき因果なれば佛の果を得るやうの爲にとむらふことをいふ
涙は琵琶の湖にさゞ波よするごとく也

近江のみづうみのかたちが琵琶に似たるゆゑひはのうみといふ也實業卿のうたに「よる波のひゞきもたえぬよつもの緒のすかたににほの海邊氷りてとよませ給へり琵琶は絃を四すぢにかくるもの故よつのをといへばひはのことになるなりさゞ波は小々波とかきてちひさき波のこと也

ひそ／＼聲

密といふ字をかさねてひそ／＼と云也

さん候

されば候といふことばをつめていふ也

粟津の汀に屯をかまへ

汀は水ぎは也屯は一かたまりかたまる事にて軍勢をあつめて陣取するをいふ也

大將時政采配ふり立

また采幣ともかいて四手のやう成ものをふりて軍勢をまくばること也采はとるといふ字配はくばるとよむ字也漢土にては史記周の本紀に武王右に白旄を乗て麾くとあり白旄は牛の尾にてこしらへたるものにて和名をざいといふ故に物をさしづする事をざいをふると云も此心也

稻麻竹葦と取卷しが

稻はいね麻はあさ竹はたけ葦はあしのことにていづれもはへしける物なればすきまなくとりかこむ事にたとへたるなり稻麻竹葦のごとしといふ事法華經にいてたり

汝が五音は

宮、商、角、徵、羽の五つを五音のてうしといふ也

六穴よりほとぼしる

眼と耳と鼻と口と前陰と後陰とを六つの穴といふ也

七顛八倒

顛はくつがへるといふ字倒はさかしまといふ字にて七の字八の字はつけ字にてこころなし

暴悪ぶ道の大江の入道

暴はあらしとよむ字也不道は道にそむけたることをいふ也

阿修羅王の荒たる如く

法華經の普門品に阿修羅迦樓羅といふ語あり科註に阿修羅は千の頭二千の手ありあるひは一萬のかしら二萬の手あるも有あるひは三つの頭六つの手なるも有と見えたり是は佛入滅のとき佛の齒をうちかきて沓れたるものにて其時韋駄天に片時のあひだに追かけられてかの佛牙をとりかへされしものなり

おまへは天魔が見入たれ

天魔は第六天の魔王のことにて人のさはりをなすものをいふ

速我夫奇代の計略

奇代は宛字也稀代とかくべし代にまれなるといふ心なり

いふ間に取出す種が鳥

南浦文集に云天文十二年八月廿五日大隅國の内種が島の西村の小浦に異國の大船一艘漂よひ着船客百餘人あれとも其ことば通せずして何國の人といふことをしらす其中に明の儒生五峰といふものありこのとき西村の司に織部丞といふもの有てよほど文字を識たりければかの五峰と筆談してこの船は南蠻國の商ひ船なることをしれりそれより嶋のつかさ種ヶ島時堯と云人その船中を吟味し禪僧忠主座といふ人を以て筆談せしむ彼船の頭分のもの二人あり一人を牟良叔舎といひ一人を喜利志多孟太といふ手に二三尺なるものをもてり是すなはち今の鐵砲也時堯値ひを限らずしてかのふたつの鐵砲をかひとり其術を獵人にならひ得たりまた玉藥の製法の事をば小臣の篠川何某といふものにならはしむこの時に當つて根來寺の僧杉の坊といふものはる／＼來りて鐵砲を求めしかば時堯其懇望ふかきに感じ津田監物と云者をして鐵砲一挺を杉の坊に贈り其上妙藥の法と火を放つ道とをしらしむまた時堯鐵匠數人をめして其器のかたちをみせ日夜鍛練して新たに是を製せんとするに其形はよほどこれに似たりといへども其底をふさぐ故

をしらず然るに其翌年また櫻國の商人たねがしまの内熊野浦に來りけるに其中さひはひに一人の鐵匠ありければ時
 堯天のあたふる所也とよろこひすなはち金兵衛清定といふものをしてその底をふさぐ法をならはしむこゝにおいて
 あらたに數挺の鐵砲を製せりその後泉州堺の商人橋屋何某種が嶋に一年滞留して鐵砲をたんれんするの術をまなび
 えて歸りしより畿内近國に弘まりけるとぞ此南浦文集の説によれば鐵砲のことを種が嶋と云ひならはしたるも其比
 よりのことなるべし

瑠璃天 狗卷之五

○信州川中島合戦 配膳齋

葉公龍を好んで晝き刻め共眞の天龍を見て魂を失ふ是龍を好むにあらず龍に似て龍にあらざる物を好といはん

この故事は劉向新序に出たりむかし子張と云人魯の哀公に目見えをしけるに哀公無禮也ければ子張哀公の僕にいひ置いて魯の國を去たり其詞にいはいく今君よき士を好み給ふと聞て來りたるに無禮のあしらひを仕給ふは葉公といふ人の龍をこのみたるに似たりかの葉公日ころ龍のかたちを好みてあるひは晝きあるひは木に刻み彩色などして龍に似たりとてよろこびしかば天龍これを聞て葉公か家に下り頭を以て牖をうかどひ尾を以て堂に拖ひければ葉公これを見て大におどろきうちすてゝにげ去しとかや日比このみし龍のかたちは其さまは似たりといへとも龍の魂なしいま天龍を見てにげさりたるは葉公まことの龍をこのむにあらず龍に似て龍にあらざる物を好むなり今君よきさむらひをこのみ給ふといへどもかくのごとき無禮をしたまふは是もさむらひに似てさむらひに非ざるものをこのみたまふなれば此國を立さる也といひしとぞ

將の賢士を好む賢に似て賢にあらず少哉才賢の臣

今戰國のときに大將たるものゝよきさむらひをこのむもかの魯の哀公のごとくにして賢人にあらざるものをこのむとおなじ事也さればまことの才智ある賢きさむらひはすくなきこと哉といふこゝろなり

無念の敗北骨髓に徹す

軍にまける事を敗北といふは敗はやぶるゝとよむ字北はつねには方角の北といふ字なれどもこゝにてはやぶるゝと

いふ心になる也其わけは通鑑集覽に服虔が云人陽を好んで陰を惡む北方は幽陰の地也かるがゆゑに軍のやぶるゝを
も北といふ也と有骨髓は骨はほね也髓は其ほねの中のおぶらと云字也徹はしみとをる心にて俗にほね身にこたゆる
といふ心なり

切所の細道より

切の字はあやまり也本字は太平記には殺所と書下學集には箇所と書て難所なりと註す

武略の銳き

略ははかりことゝよむ字にて武略はいくさのはかりこと也

かゝる奇計をなしけるぞ

軍法に奇計正計あり武備志に奇正虚實は兵家の樞要也と有て正計はありふれたるはかりこと奇計は思ひもよらぬ計
を云也

間者を入れて

間はすきまとよむ字にてすきまよりやうすをうかがふものを間者といふ也

士卒のかけ引

士はさむらひ卒はひきゆるとよむ字にて足輕の類をいふなり

秋の田面の月に嘘き辯を荷ふて山路の花を友とし

月に嘘とは田をかりに行ても月をおもしろく思ひて歌などをうたふこと辯を荷ふてとは山に柴などをかりに往ても
花をめでゝわか友だちのやうに思ふといふこと也古今集の序にたきよをおへる山人の花のかけにやすめるが如しと
書たる心をとれり勘助が賤しきわざをしても世にへつらはず月花をたのしむおもむきを云也

天命をたのしみ

いやしきわざをするも天道のはからひ也とおもひてそれをたのしみとして不義なることをせぬよし也

攀喰張良也も

前漢書に攀喰高祖に従つて天下をさだめ功を以て舞陽侯に封ぜられしこと見えたりまた張良も同書に下邳の圯橋にて太公望が兵法を黄石公にさづかり後に高祖の師と成て留侯に封ぜられしよししるせり

弓矢八幡

八幡大菩薩は源家の氏神にして弓矢の守護神なれば弓矢八幡も照覽あれ今いふ詞に違はじと云誓ひの詞也

廿四孝

孝子廿四人をあげて廿四孝といふこと日記故事に見えたり

だいの間に

湯などを汲ために臺子を置たる次の間也庭訓往來には圍爐裏の間とあり

頭は雪

白髪になりたるを云也古今集康秀の歌に「春の日の光りにあたる我なれとかしらの雪と成ぞわびしきとよめり

祐筆衆にもすくない程の

祐の字はあやまり也右筆と書べし東かよみ治承四年の所に大和の判官代邦道右筆す御書御判を加へらると云事あり又同六年の所に伏見の冠者藤原廣綱始めて武衛に参る是右筆なりと有また木曾義仲が右筆大夫坊覺明と有をみれば頼朝卿の時代より武家の書役を右筆といひしことしるべし

おりしも床の倭琴

源氏河海抄に和琴は伊弉諾伊弉册の尊の御時作り出さしめたまふよつてもろくの樂器の最上にこれをおく也あづまごとゝも云也鴨の長明の無名抄に和琴はもと弓六張を引ならべて用ひけるを後に琴に作りたる也と有今こゝにやまとことゝいふものは今の十三絃の琴なり此十三絃のことを箏のことゝいふ也これはむかし命婦石川の色子といひし人筑紫の彦山にて唐人にあひてつたへはじめ宇多の天皇にさづけたてまつるが始也といへり此河海抄の説によりて是をつくし琴とは云也今の箏の手は寛文のころ筑後國の僧法水といふ人善導寺に住してつくしごとを學びしが後江戸にゆき還俗して八橋檢校に傳えしかば八橋檢校これをならひえて其節奏をあらためて三絃の曲を合せしよし和事始に見えたり八橋檢校は貞享二年に七十餘歳にて卒す墓は黒谷に在と云

おめず場うてぬ白書院

近世武家にて客に對面する所を書院といふはいにしへは大家にては主殿といひまた客殿といひ小家にては出居といふ是對面所也書院とは佛寺にて佛書を講ずる所也俗家にはなき事也しかるに太平記卷三十七に佐々木佐渡入道道譽が宿所のことをいふに書院には義之が草書の詩韓愈が文集とかけり思ふに鎌倉の時代北條一家はなほ禪法を崇敬足利尊氏もまた禪法に歸依して夢窓國師を師とせられければ上の好む所はかならず下これにならふ事にて禪法を學ばざるものなし故に其家居の内に書院を立佛書をよみ座禪する所とせしより後には書院と稱したがへし成べしといふこと秋草に見えたり

あからむ顔の櫛もみぢ

櫛は木の名にて秋はみもぢするもの也こゝは耻といふ字にかけてはづかしがるこゝろにもちひたり櫛紅葉のうたは夫木集に爲家卿「山ざとの賤か垣ねの村竹にもりて色つくはしもみち哉とよめり
世尊寺やうのはしり書

世尊寺家の先祖禪大納言行成卿能書のきこえ有て本朝三跡の一人なりしゆゑ子孫能書家と稱す數代の後行能卿、經朝卿、經尹卿、行尹卿、行俊卿などみなみな能書の聞えあり系圖は諸家傳につまひらかなり走り書とは俗に達者にかくといふことも也つれづれぐさに手などつたなからずはしりがきとあり

狂文の綾の吳服

庭訓往來に狂文の唐衣といふこと有て註に狂文はいろ／＼のうけもんあるを云といへり吳服はむかし吳の國よりくればとりあやはとりと云二人の織女來りてきぬをおりはじめしゆゑ吳服といふ也吳の字をくれとよみ服の字をはとりとよむなり

式臺ふかく

式臺は宛字也色代と書べし書言字考に色は顔色のこと代はかゆるといふ義にて顔色を常とかへてうやまひつゝしむ心也とあり

遠路の御光駕

駕はのりものといふ字光は人をほむる心也よつて人のわが方へ來るを光駕といふなり

御逗留

逗留も留もとまるといふ字なり

隨て此小袖は

隨がつては書狀にもかく詞にてまづ何々といふ事をかいてそれに從ひてと云事にて俗に夫につきてと云心に遣ふことば也裝束拾葉抄に大袖はうは着也袖口大也小袖はした着也そで口大袖よりちひさしかるがゆゑに小袖といふとありこの上着下着といふは今下々にていふうはぎしたぎの事に非ずこの下着といふが下々の上着也其譯は上つかたに

ては又此にうへのきぬとて禮服をめさるゝ故につねの上着を下着といふ也また秋草に小袖といふはすべてその下を丸くぬひたるを云裕にても綿入にてもひとへものかたびらにても袖の下圓きは小袖なれども今はわた入のみ小そと云事に成たりと有

二つ引龍の

紋といふは衣服に五所に付るばかりをいふにあらず公家にてはすべて物のもやうを紋といふ也また武家の紋は旗幕などの目じるし也是保元平治の戦のころより始りし事也後世にいたり旗幕ならで衣服にも紋付ることに成しなり東山義政公の時代に白き綾またはつむぎなどを地をいろゝに染て御紋を紫などにて付たる事宗五記に見えたりされど御紋定まらずといふをみれば其ころは衣服は家のもんにかぎらずなにの紋にても付し也後世にいたりては家のものの外はつけぬ事に成たりと秋草にするせりふたつひき龍の龍の字に兩の字のあやまり也引兩ともいふこれは足利家庶流の衣紋にて今いふ二つ引の事也

御主人の本丸か

城を築く法に長く方なるを利あらずとし小さく圓きを以て要害とするゆゑ本丸二の丸三の丸などいふよし書言字考に見えたり

御時分がよし料理く

貝原好古の諺草に云料理といふ字は晋書に出てはかりをさむるといふ義也今俗に食物を割烹ことを料理と云は居家必用に菹蕪を製することを料理すると有てもろこしにもこの詞あるにやとかけり按ずるにこの好古の説は非也こんにやくを製するもはかりをさむるといふ心也もろこしに食物を調味することを料理といふこと決してなし是は日本にていひつたへたる俗語なり

本膳の懸盤

本膳は二の膳三の膳とだん／＼すゆる故はじめに持いづるを本膳といふ也かけ盤はふちの高きあしつきの膳なり敷のごとく平かにしてふちあるを手がけといふ類なり盤の字はすなはち今いふ膳の事也三光院内府記にも膳の事を盤としるしたまへり

珍物のやさい美味をとゝのへ

野菜は青ものを云美味はうまきあぢはひ也

配膳の侍

はいぜんは膳をくはるといふことにて禮義をたゞして品々の物をまくばりすゆる心也

ひたゝれつくろひ

西三條裝束抄に布直垂は諸大夫着すこれを俗に大紋といふとあり秋草にひたゞれは官服にあらす無位無官のものゝ服なるゆゑいにしへは官位なき武士も式正のときは素襖をぬぎてひたゞれを着せしとあり

ゑぼし八分にさし上

目八分といふよりすこし高くさゝげる事を烏帽子八分といふ也

官領ふうのすり足にて

官の字はあやまり也管領と書へし室町家にて天下の政をとりおこなふ人を執事とも管領ともいひたることは足利高經の時よりはじまるよし書言字考に見えたりもろこしにて詩に管領の字を用ひたるに聯珠詩格の註に管は主當也領は統領也とあればものをつかさどりてとりしめる心也

邊國の義

邊土とも邊鄙ともいふ心にてかたるなかといふ卑下の詞也

老母をしゃやくし

會釋と書てこゝろにがてんしてあしらふこと也

隔心がましい齟齬

隔心はこゝろにへだてのあること齟齬はもてなしとよむ字なり

殊に仰山な

ことわざ草に物の廣大なるは況山といふ山にたとふとよめり韻會に況は譬擬なりとしるしたり按ずるにこの諺草の説むつかしくてあしゝやはり仰出とかきて高き山をさしあふむきてみるやうなる事をぎやうさんといひならはしたる物也仰山といふ熟字は漢土には仰山禪師といふ僧有て仰山禪師語録といふ書もある也

近習衆か外さま衆か

近習は禮記の註に天子の親しく幸する臣を近習といふと有日本紀にては近習の字をちかくつかふまつるとよませたり外さまは外様といふことにて君の手まはりのことにはあらずして外むきの事をつとむる役を云

女子共に給仕さする此母

給仕はそなへつかふとよむ字にてそれ〳〵の事にめしつかはるゝ心也されど本字は給事とかいてもろこしの官名也

事物紀原に給事といふ官名有て殿中に事あるを以て給事中と云と記せり

慇懃な給仕ではきうくつてたべにくい

いんぎんといふ詞はもとは物のねんごろにしんせつなる心也韻會に慇懃は委曲の貌とあり諺草に今俗に隔心なる事をいへるはあやまり也とかゝれたれども是もあたらぬ註なりものをねんごろにくはしくする氣味の字なれば丁寧すぎ

ることをいんぎんと云也
 辭宜は却てめいわく

辭宜は宛字にて時宜と書べし時のよろしきにしたがふといふ事にて無禮のなきやうにさしひかへる事也漢書に時宜に達せずといふ詞あり迷惑はまよひまどふといふ心にて俗にこまり入といふ心也韓文に迷惑の胸を開くと云語有
 楠正成が再來とも

再來はふたゝびきたるとよみて生れかはりといふこと也
 玉を泥になげうち

寶となる玉を泥の中へなげすて世にめづらしき麒麟といふけだものをつなぎおきて犬のかはりにかふやうなるもの
 也といふたとへ也麒麟は獸の中の聖なりといふこと王充論衡にみえたり

かゝる英雄の御老母

劉邵人物志に草の精しく秀でたるを英といひ獸の上にたつものを雄といふそれゆゑ人の文武をかねそなへたるものをこれにたとへ才智かしこく人にひいてたるを英といひ勇氣の人にまさりたるを雄といふされば張良は英也韓信は雄也といへり今山本勘助は張良韓信をひとつにしたるさむらひ也といふ心也

ふ思議の御出

ふ思議は思ひはからずと書て佛經に出たる字也俗におもひよらずと云心也

優曇花の咲たる悦び

法華經に其人甚希有なる事優曇華に過たりと云語あり疏には三千年にひとたびこの花現すれば金輪王出るとあり又楞伽經の疏にうどんげは世間の中において人曾てみるものなしといへりよつてあひがたくめづらしきことのとたとへ

とす源氏物語若紫卷に源氏の君のたま〜北山の僧都のもとへまゐり給ひたる時僧都のよろこびてよまれたる歌に「うとんけの花まちえたるこゝちして深やまさくらに目こそうつらねまた按するに日本にては芭蕉のはなをうどんげといふこと東かゞみに見えたれどこれはもちひ難き説なりしるしのさかづき頂戴の望み

頂はかうべ戴はいたゞくといふ字也法苑珠林に佛經のことをいふとて肩のうへに荷ひあるひは頂戴すとかけるも經文をかしらにいたゞくこと也

長尾彈正の少弼輝虎

彈正はたゞすつかさとよむ字にて風俗をよろしくし内外のひがことをたゞす官なるよし職員に見えたり其したやくを少弼として一人有やまとよみにすないすけとよむ也

天より受たる明命をかへりみ

大學に太甲にいはいはくこの天の明命をかへりみるといふ語を用ひたり天よりうけたる明かなるおほせつけをよく守るといふ事也かへりみるとはかの天命をまもることをとりうしなけぬやうにわが身にかへりみるといふ心成よし四書蒙引にとけり

天の時地の利に叶ひ諸卒これに和し

孟子天の時地は地の理にしかず地の理は人の和にしかずと云語に審り軍をいだすに天にとりてはほどよき時節をはつさず地によりてはほどよきみちに出るを大將の心がけといふ也其天の時地の理を得たりといふとも多くの士卒のころが打やはらがねば軍には勝たれぬと云なり

こしもとの女わらは

女童とかきてめのわらはとよむ也俗に小女郎といふほどの事なり

鶏をさくになんぞ牛の力を用ひんとは聖人のいましめ

五行の本に牛のちからと書たるは大なるあやまり也牛のかたたと書へしこれは論語に出たる孔子の詞にて鶏はちひさき鳥なればそのにはとりを料理するに牛をれうりする庖丁はもちゆまじきとのたまへる也集解の孔安國の註に小さきことを治むるになんぞ大きな道をもちひんといふ心也とあり今この勘助の母に輝虎の給事せらるゝが其やうなる物なりとあざける詞なり

偽り表裏

口と心とらおもての有こと也

けふのふるまひにあらはれ

このふるまひは舉動と書てたちふるまひのことなり

おじやらしませぬ

御座りませぬといふにおなじおば御と同しくじやとざと聲かよひらとりと五音かよふ也みなか人の詞におんじやり

申といふもござりますと云事也

膝に味噌汁淵をなし魚よりおどろく嫁娘

淵をなすとは汁のひぎにたまること也これは詩經の鳶飛て天に戻り魚淵に躍るといふ句によりてかやうにつとけたるもの也この淵に大學論語孟子などの語をおほく引て用ひたればかやうの所にまで經書の語をもちひたること作者の力あらはれておもしろきこと也

狂人同然と

きちがひと同じこといふころ也

重代のあづき長光

秘談抄備前長船物の系圖に長光初代と二代と二人有初代の長光は法名を順慶と號し左衛門の尉と稱す建治弘安正應のころの刀鍛冶也二代の長光は左近將監と稱し正應永仁正安乾元嘉元徳治のころの人也と有初代長光のうちたる刀にてあづきのきれしといふことさまにいひ傳へたる俗説ある故後にあつき長光と稱する也

ことを律にしらべかへ

琴の調子に呂と律とあり源氏ものかたりはまきまの巻にりちのしらべは女のものやはらかにかきならしてと有細流抄に律は秋を司どるてうし也又律は陰なれば女のかた也ともいへり

むなしくかれしはまきまを

帚木とは美濃信濃兩國の其原ふせやといふ所にある木也遠くみては帚をたてたるやうにて近くて見ればそれに似たる木もなしと源氏ものかたり宗祇抄にせるせり帚木をはまの事にたとへたる證歌は續拾遺集平の正家の歌に「しなのなるそのはまにこそやとらねとわかまきま」と今はたのまん」とよめり

○松風村雨束帶鑑 うつほ猿

八まん大名

神社考に縁起を引て筑前宮崎に入幡宮有むかし白幡四つ赤幡四つ天よりこまにくたる故に入幡となづくといへり大名の字にしへの書には見えす白川顯王紀に安元三年四月諸國の大名國役に應ぜずといふこと見えたり安元は高倉の院の年號にて平の重盛の育王山に金をおくられし時也さればそのころより大名といふ稱號はあることしるべし庭

訓往來には關東下向の大名高家の人々とありこの往來の出來しは南朝のとき也今八まん大めうといふことは八幡は源家の氏神にて弓矢の守護神なれば源氏の大名といふ事を八まん大めうといふなるべし

劍は箱に納め弓は袋に治るといふ

詩經の周頌に明に昭なる有周式て位にあることを序つすなはち干戈を戢めすなはち弓矢を齎にすといふ詩ありこれは周公の亂を治めたまひて天下太平になりたるゆゑ干戈を箱にをさめ弓矢をふくろにをさめ給ふことを贊て作りたる詩なり

突もうら／＼とのどやかにござれば

うら／＼ははるの日のながくのどかなるを云菅家文章の詩の二月三月日遅々といふ句を聖一國師の點にきさらきやよひ日うら／＼と附られたりまた西行の山家集に「ことゝへはもてはなれたるけしき哉うら／＼かれなや人のこゝろ」といふ歌有これはこゝろのやすらかなるをいへり

太郎冠者

書言字考に往古いまだ官に任せざるものはたゞ太郎次郎と稱すとありて上にたつものを太郎といひ其次を次郎といひたる也さて冠者といふことは元服して間のなき若者をおほく冠者といへり木曾の冠者善仲浦の冠者範頼などもわかき人の稱なりくわじやと云はくわんぢやの字をつめていふなり

のさもの有かやい

書言字考の俗語に野風俗といふ字を出せり是はのふずといふことば也すべていやしき事に野の字をつくるは漢土にも野鄙とかきてはいやしきことゝし野人と書ていやしき人とする事論語にもいれたりこの方の俗語にもらといふは放蕩なる若ものをいへりまた家に畜はぬ猫をのらねこといふは仲正の歌に「眞葛原下はひありくのらねこのな

つけかたきは妹かこゝろかとよみ給へりこれは野猫といふことにてらの字は付字也古今集のうたに庭もまかきも秋の野らなるとよみたる同しこと葉也されば此のさものとといふは俗にいやしきものゝ無禮なる事をするをのさばるといふに同じくいやしめ云詞なるべし

野遊山などは何とあるふ

野遊山とは野に出てあそぶことをいふ俗語なり諺草に云晋の郭文弱きより山水を愛し名山にあそび老に至て終に虚を山中にむすびて住りこれを蒙求に郭文遊山としるせり今ぞくに遊樂することを遊山といふ郭文が遊山とは興味はなほだ異也といへりあんずるに遊山は山にあそぶとかく字なれば野にあそぶことを遊山とはいふまじき詞なれどこれはたゞ外へあそびに出ることをいひならはしたる詞なればしひてとがむべからざる物也其子細は三才圖會に遊山船といふものありて湖などに遊ぶ用としておほく酒を載る故遊山をもつて名とすといへりまた堯山堂外記にも遊山船を雇ふて石湖といふみづうみにゆきたる事もあれば野にあそぶことを遊山といふもあなかにあやまりとは定めがたし

此あたりの猿引でござる

續撰吟抄さる引の歌に「畜生もつかひいるれは中々にわれにはましの能のおほさよとよめりこの歌は文明のころの職人歌合にも入たりこの判者は逍遙院實隆公也漢土には猿引を狙公といふこと列子にみえたりまた唐晉統箴には弄猴人と有て弄して君王を一笑せしむとあれはまつたく日本のさるつかひと同じこと也

たのふだ人の靱が

わが主人と頼みたる人といふ事を頼ふだ人と云なり靱の事は冬草に云矢を入るうつぽといふものは上古の書に見えず中興にできしものなるべし義家奥州後三年の合戦のとき舍弟義光奥州へ下らんとしけるととき相摸の國あしがら山

にてうつぼのうちより笙の譜をとりいたし豊原の時秋にさづけられしこと古今著聞集にみえたり東鑑に羽壺とかきたり空穂と名付しことはその中空にして外に毛皮をかけたる體粟の穂に似たれば空穂といふなるべし又靱の字をうつほの字とするはあやまりなり本字は靱かくのごとく書て是はゆきといふ字なり靱は形異なるもの也春草に云むかしはうつといふもの有て腰につけたりしを後に穂を作りそへたるのと其うつといふものゝ繪圖を武用辨略に載たり用ゆることなかれうつといふもの古書に譬て見えず其繪圖も出所をいはず妄作なりと云々今あんずるにうつぼものかたり俊蔭の巻にとしかげの娘北山の奥なる熊のうつほ木の中にて子うみたる事をかけり熊のうつほは精華録には熊館とかきて古木の朽てうつろになりたる所を熊が臥所にすることをいふ也さればすべて中のうつろなる物をうつほといふゆゑこのうつほも其ころにて名づけたるものなるべし

しざりおろ

すされといふに同し俗に下りおろふといふこと葉也

いかい大名じやといふて

いかいは大きなるといふこと葉也

此大鴈股を以て

春草にいほく鴈股となづくる事は鴈のあしのゆびの股に水かきあるに似たればかりまたと名付しといふ説あり用ゆべからず鴈にかぎらず惣じての水鳥みな水かき有また俟とあればとてゆびのまたとするもいかゞもある人のいふは鴈俟といふはかへるまたなり蛙のまたのごとくなる故かへるまたといふこと葉を略してかるまたと云又轉じてかりまたとよびたる也其詞に付て鴈俟の字を宛用ひたるといへるは發明の説也用ゆべし

きうしよがござります程に

院本に急所と書はあやまりにて本字は灸所なり灸をすゆる穴所のことにて其穴所を撲ば死するをいふ也

ヤイマシよ

猿をましともましらともいふなり翻譯名義集にさるを天竺にては摩斯吒といふとありしかればましらは和訓にはあらずして梵語なるをそれを略してましともいふなるべしと讀たる歌は未木集猿の題にて「おもふこと大江の山に世中をいかにせましと三こゑなく也といふ兼昌の歌出たりましらとよみたる歌は古今集躬恒のうたに「わひしらにましらな鳴そあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬならぬと申せば殿様の

秋草にいはく殿と稱すること禁中にて殿と稱するは攝政關白より外にはず其外の人を表向にて殿といふ事も内々のうやまひ也いにしへよりありしこと也殿は宮殿の殿にて宮殿をかまへ居住したまふゆゑ殿といふ也されば攝政殿關白殿といひまた殿とばかりもいふ也神のことを太神宮八幡宮といふ宮とおなし意なりされば殿といふはいたつておもき稱也つねの人の名に殿と付てよぶは分にすぐる事なりされども内々のわたくしのうやまひに殿とよぶ也とあり様といふことはまへに註す

船ごく眞似をしますかいの

まねはまねぶといふことを略したる語にて學の字なり源氏ものがたり品定の所にさてありぬべきかたをばつくりひてまねび出すにそれしかあらじとそらにいかゞはおしはかりおもひくたさんとありこのまねび出すといふ詞もまねをして聞すといふこと也俗に眞似と書は後の世におしあてたる字なり

畜生さへ物を知てなげくに

畜の字はかひやしなふといふこゝろ也毘婆娑論に横生は生を裏ること愚癡にしてみづから立こと能はず他のために

畜養せらるゝゆゑにちくしやうとなつくといへり
物の哀をしらぬといふは

俊成卿の長秋詠藻に「戀せず人はこゝろもなからまし物の哀れもこれよりそしる
鬼畜木石におとつた

鬼や畜生や木や石やと物のあはれをしらぬ心のなきものを四つかぞへ立たる也俗にいは木にあらざればといふは人
といふものはよく哀れをしるといふこゝろなり文選の鮑昭か詩に心木石にあらざれば豈感なからんやと作り白氏文
集にも人木石にあらずみな情ありともつくれり伊勢ものかたりいは木にしあらねばこゝろくるしとやおもひけん
ありげんじ物語にもいはきならねばおもほししるともかけり歌によみたる例は順徳院御集に「人ならぬ石木もさら
にかなしきはみつの小島の秋のゆふくれとよませたまへり

息災延命富貴萬福の御祈禱

息災は大日經に此は是息災の法也といふこと有てわざはひをやめるといふ事也萬福はもと詩經にいてたる字にて尺
牘にみてたくといふかはりに萬福とかくこと翰墨全書に出たり祈禱は神にいのることなり

猿がまいりてのふ仕る

藝能をするといふこと也前に註せしざる引の歌にもわれにはましの能のおほさよとよめるは猿のげいのう數々ある
をいふなり

御知行まさるめてたき

いせ物語にかすがの里にしるよしゝてある註に知行の事也と有眞名伊勢ものがたりには知由と書て其人の領知する
ところよりをさむる米穀を知行米といふ也

人命草木増長すれば

人の命ものひ草木もますくおひのびるといふことなり

綾が千反錦が千反

續日本紀に元明天皇の和銅五年に伊勢尾張以下二十一ヶ國にはじめてあやにしきを織しむる事見えたり

なばか佐古志か室がとまりか

那波佐古志室みな播磨の地名也

ふねのなかにほ

ふねの中には何とおよるぞとまをしきねにかぢをまくらにひんだのをどりをひとをどりといふ文句三絃本手の飛驒

組末草なり

何とおよるぞ

寐ることをおよるといふは古き詞なり増かどみに帝といづくにおよるぞと問ふるのおとどにといらふればと有物

に倚かゝりてねる事也

楯をまくらに

夫木集公朝の歌に「わするなよ同しみなとのかちまくらおもひくりにこきわかるともと讀り

一のへいたて二のへいたて

幣をたてゝ祈禱することろなり

三に黒駒信濃を通れ

八月十五日しなのより黒駒を引てみやこにのぼるを駒牽といふことは公事根源にみゆ

船頭とこのそゆうけんなれ

勇健とかきていさましくすこやかなりとよむ
はくさいこくより

百濟國は新羅百濟高麗とてむかしは三つの國なりしが今はあはせて朝鮮國と成たるよし明史にみえたり
普賢文珠のめされたる

文珠の獅子にのり給へるかたちは佛像圖彙にみえたり翻譯名義集に普賢と文珠と二つにして二つにあらざこの菩薩
つねに一對とすといへり

千秋や萬歳の

秋といふ字はこゝにては春秋の秋に非ず説文に秋は禾穀熟する也とありてものゝ成就する時を秋といふ也麥が熟す
るゆゑ四月をも麥秋といふ類なりゆゑに千秋も千年といふにおなじ韓非子に君をして千秋萬歳の聲を聒くわしめんとい
ふこと有玉維の詩にも萬歳千秋聖君に奉ずとつくりてめてたき事に用ることば也

昭和四年十月十日印刷
昭和四年十月十五日發行

特製
第十八回配本
追加募集
第十四回配本

〔非賣品〕

帝國文庫
(第十篇)

紀海音淨瑠璃集
並木宗輔淨瑠璃集

編輯者
兼發行者

右代表者
取締役社長

印刷者

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

株式會社
博文館

大橋勇吉

東京市小石川區久堅町百〇八番地

君島潔

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

發行所

株式會社
博文館

文館

振替口座東京二四〇番

製版所 印刷所 製紙所 製本所 共同印刷株式會社
共同印刷株式會社
王子製紙株式會社
中條製本所
香取製函所